

TOTO

通信

2019年 新春号

Toward a Creative
Architectural
Scene

Iwamoto Masaaki → Vietnam



Kawabe Naoya → Cambodia

Special Feature
Japanese
Architects
on
the Asian
Scene



特集 / アジアで設計するということ



Saeki Satoko + K.M.Tan / KUU → China



Sato Kengo → India

特
Special Feature
集

アジアで 設計する ということ

インド

India

Special Feature

interview with

03



Iwamoto
Masaaki



House in Santiniketan / photo by Sato Kengo



House in Nha Trang / photo by Oki Hiroyuki



Special Feature

interview with

04



Sato
Kengo



ベトナム

Vietnam

文 / 村松 伸	4
佐伯聡子+K.M.Tan / KUU 「マイナスKハウス」	8
川辺直哉 「TAMASA」	16
岩元真明 「ニャチャンの住宅」	26
佐藤研吾 「シャンティニケタンの家」	34

シリーズ

旅のバスルーム106	文・スケッチ / 浦 一也	リゾート・ヴィラ・ルビン(クロアチア・ロヴィニ)	42
現代住宅併走42	文 / 藤森照信 「Tree-ness House」	設計 / 平田晃久	44
最新水まわり物語48	臺北南山廣場		50
地域に生きる会社77	エドケンハウス		54
新商品開発物語	システムバスルーム「sazana」	床ワイパー洗浄(きれい除菌水)	56
TOTOギャラリー・間で観覧会をします	RCRアーキテクト展	夢のジオグラフィー	60
News File	TOTO News, Cera Trading News, Books		62

表紙写真 / アジアで活躍する4組の建築家。

写真左上・川辺直哉、右上・岩元真明、左下・佐伯聡子+K.M.Tan、右下・佐藤研吾。

表紙撮影 / 写真左上・川辺明伸、右上・遠藤秀一、下2点・山内秀鬼。

編集制作 / 伏見編集室 デザイン / 岡本一宣デザイン事務所 印刷 / ゼネラルアサヒ

カンボジア

Cambodia

TAMASA / photo by Kawabe Akinobu

今、新しい世代の建築家たちが、海外での活動に果敢に挑戦しています。

世界的に名の知れた建築家が招かれて設計を行うのとは異なり、

現地に溶け込み、

切り開いていく方法です。

とくに、彼らが注目しているのはアジア。

言葉や文化、技術の隔たりを

まのあたりにしながらも、

なぜ海外での設計に

挑みつづけているのでしょうか。

彼らはみな、「アジアは近い」と

口を揃えて言います。

日本に拠点をもちながら、

軽やかにアジア各国で活躍する、

4組の建築家に、現地への

飛び込み方を語ってもらいました。

Special Feature

01



interview with

Saeki Satoko
+
K.M.Tan
/ KUU



Minus K House / photo by Jeremy San



Special Feature

02



interview with

Kawabe
Naoya



中国

China

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 520
New Year 2019

エッセイ

建築家たちはなぜ移動するのか 攪乱、顕示、共生するたくましさ

1

ニューヨークで出会った中国人建築家に誘われて

2

カンボジアの建設事情の調査から始まった

3

ベトナムのローテックに先進性をみて

4

インド・シャンティニケタンの学校を訪ねて

「TOTO通信」の
バックナンバーをインターネットで
ご覧いただけます。

→ <https://jp.toto.com/tsushin>

Special Feature
Japanese
Architects
on
the Asian
Scene

建築家たちは なぜ移動するのか 攪乱、顕示、 共生するたくましさ

たとえば、
アジアと
長く
かかわると

長いこと東アジアや東南アジアを放浪しているとジミな建築史家ではあるものの、じつにいろいろな派手で

著名な建築家に会うことになる。中国の現代建築家の先達中の先達、楊廷宝氏（*1）とは北京のどこかの大宴会の円卓で隣り合わせになったことがある。まだ、僕が20代後半だった頃だ。娘がまだ小さい頃、レム・コールハース氏に抱かれたのは、確か張永和氏（*2）主宰のシンポジウムの園林でのパーティだったと

思う。

近頃出てきた古い写真には、人民大会堂での日中建文化交流会議の際、笑みを浮かべる磯崎新夫妻の隣で、40代前半の若気のいたりがまだむんむんの僕が写っている。山本理顕さん（*3）が「建外SOHO」を設計する際、そして、隈研吾さんや韓国の承孝相氏（*4）などを含む当時のアジアの若い建築家たちが別荘計画「Commune by the Great Wall」（*5）に参加する際にも、直接的、間接的に関与した記憶がある。

あるいは、六角鬼丈氏（*6）にお会いしたのは今世紀になってからかもしれない。東京藝術大学を退任されて北京の中央美术学院へと特任教授として赴任した。北京で事務所も開設し、弟子たちを何人も呼びよ

*1
楊廷宝

Yang Tingbao

ヤン・ティンボウ／1901～82年。中国河南省生まれ。21～24年ペンシルベニア大学建築学科に留学、建築家ポール・クレのもとで学ぶ。40年～中国の国立中央大学（現・東南大学）教授。中国では100作品以上を手がける。おもな作品＝「京奉鐵路瀋陽總站」（28）、「成賢小築」（46）、「自邸」など。

写真提供／王 漢陽



「京奉鐵路瀋陽總站」

1928年

設計／楊廷宝

*2

張永和

Chang Yung Ho

チャン・ユンホー／1956年中国北京市生まれ。81年南京工学院（現・東南大学）卒業。84年カリフォルニア大学バークレー校修士課程修了。93年に中国でアトリエ非常建築を設立。おもな作品＝「二分宅（Split House）」（2002）、「柿子林（Villa Shizilin）」（04）など。

撮影／浅川 敏



「Split House」
（*5の計画地内に建設）

2002年

設計／張永和

*3

山本理顕

Yamanoto Rikien

やまもと・りけん／1945年中国北京市生まれ。68年日本大学卒業。71年東京藝術大学大学院修了。73年山本理顕設計工場設立。おもな中国での作品＝「建外SOHO」（2004）、「天津図書館」（12）など。

せた。そのひとりである菅根史郎さんは、中国人女性と結婚し、北京に事務所を開設し、ライフスタイルシヨップなども手広く運営している。長くアジアにかかわっているそんな一連の日本人建築家たちの「進化」の過程をちくいち観察でき歴史家としては満足なのだが、アジアに関与した一個人としては、21世紀の若い建築家たちのフットワークのよさはちよつとばかりうらやましくも思う。

よく考えてみるならば、僕の抱いた羨望とはなんなのだろうか。彼らと20歳ほど異なる年齢の差か。人生の上り坂と下り坂とでは変化の速度が圧倒的に異なり、気力も劣る。あるいは、その社会への参入深度の違いなのか。僕が北京に長いた時代、まだまだ外国人への制限は多く、あくまでもお客さんであって、融通無碍なる行動はできなかったのだから。

北京で活躍する若い日本人建築家への羨望は、バンコクでタイ人女性と結婚して設計事務所を開く、私の学生だった岩本昌樹くん(*7)、ホーチミンやプノンペンを行き来する岩元真明くん(本誌26〜33ページ)へのものと似ている。いずれも若くして現地に入り込み、実務をこなし、そのうえ、日本を含めた複数の建築世界の境界を軽々と飛び越えているその姿はとてもまぶしい(*8)。

歴史に みる 建築家の 移動

各地に活動を展開する。ただ、建築家が移動すること

アジア建築史
研究をもつぱら
にする建築史家
の僕が移動する
のは当然だとし
ても、建築家た
ちも国境を越え

は決して特殊な現象ではない。建築家を建物のつくり手だと定義するならば、人類の起源と同じく長い歴史をもっている。なにしろ、人類は移動するものであり、そして、人類は建物をつくるものであるのだから。だが、もう少し専門的な知をもつて、国境を越えて移動するようになるのは、19世紀半ばの大英帝国の建築家たちの体験に始まる。世界の3分の1を有していた大英帝国は、カリブ海諸島やカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、マラヤ半島、香港、上海、インド、そして、アフリカなど、植民地や租界での帝国主義的活動に従事した(*9)。それに倣って、フランス、ロシア、ドイツ、イタリア、日本などの建築家たちも国境を越えて世界各地に広がっていった。戦争が終わり冷戦時代を経てアジア諸国の政治・経済の隆盛をみる現在、建築家の移動はさらに盛んになっている。19世紀の大英帝国の建築家から始まって、現在に至る移動する建築家たちを、大雑把に類型化するならば、①冒険型建築家、②出張型建築家、③共生定住型建築家、の3つが抽出できるだろう(7ページの表)。社会が安定するにしたがって、①から③へと移行する。

①冒険型建築家…本国が政治的、あるいは経済的に不安定になったとき、多くの人はフロンティアを求めて出奔していく。大英帝国の拡大の初期、いまだ、正規の建築家が登場していない時期、多数の測量士、土木技術者たちが世界に散った。銀座煉瓦街をつくったトーマス・ウォートルス(*10)などがその典型で、彼は香港、上海を経て、幕末、維新後の日本にやってきて、やがてゴールドラッシュに沸くアメリカの西海岸へと去っていった。

②出張型建築家…ふたつの地域の技術的差が圧倒的にあるとき、権威と技術、あるいは、国家を背負い多

村松 伸

文

Muramatsu Shin

写真提供/山本理顕設計工場



「建外SOHO」

2004年

設計/山本理顕

*4

承孝相

Seung H.Saeng

スン・ヒョサン/1952年韓国ソウル市生まれ。79年ソウル大学大学院修士課程修了後、ウィーン工科大学に留学。79年〜空間社。89年にHOJE architects & plannersを設立。おもな作品「鶴洞守拙堂(93)」、「Commune Club」(2001)など。

撮影/浅川 敏



「Commune Club」
(*5の計画地内に建設)

2001年

設計/承孝相

*5

Commune by
the Great Wall (別荘計画)

2001〜05年、北京市街から約60kmの万里の長城を望む8kmの敷地に民間デイベロッパードストーン社が開発した別荘地。アジアの12人の建築家が設計に参加。写真はそのひとつ。

撮影/浅川 敏



「Great (Bamboo) Wall」

2002年

設計/隈研吾

くの建築家が出張の形式で他地域に移動する。帝国ホテルを建てたフランク・ロイド・ライトやチャンドーガルで活躍したル・コルビュジエなどがそれにあたる。現在、世界を席巻している著名日本人建築家も、じつはこの範疇に入ることになる。

③共生定住型建築家…本国は決して不安定なのではないが、保守化が進んだとき、若い進取の気性をもつ建築家たちは興隆する別の地域に移り、自らの才能を開花させる。明治日本、やってきたのはジョサイア・コンドル先生であり、戦争を挟んではアントニン・レーモンドであった。現在の日本であればクライン・ダイサムのみたりなどがいる。僕が北京で、あるいはほかのアジアで遭遇してうらやんだのはこの類型の建築家たちであった。

建築家たちはなぜ移動するのか

まっついている。本国の不安定(①冒険型建築家)、他地域との技術的・経済的・政治的差異(②出張型建築家)、進取の気性(③共生定住型建築家)などである。答えるべき残りの半分は、現地側への効用についてである。社会学や民俗学でいえば、彼らは「他者」であり、「まれびと」であり、「異人」であり、「トリックスター」で

ある。それらが現地社会に多くの刺激を与えることは、赤坂憲雄『異人論序説』(*11)や折口信夫の「まれびと論」(*12)でつとに述べられ、近年では敷田麻実がその地域づくりへの効果を論じている(*13)。

それらを敷衍し、また、建築家独自の特色を加味するならば、次のようになるだろう。①冒険型の建築家は、異人、まれびとに近く、現地社会の建築界を攪乱し、良きにしる悪しきにしる変化を与え、そして、無責任に立ち去っていく。②出張型の建築家は、国家や会社や本人のプライドを背負い、顕示欲高く、しかしきっちりとした成果を注入していく。プライドの高さと顕示欲の強さは次の出張への糧である。そして、現地社会に迎合するかのように入りエンタリズム的視線を挿入する。

最後の③共生定住型の建築家は、小規模にするりと現地社会に入り込み、深いところで現地の建築を理解しながら、異人建築家のトリッキーな目をもって、まったく異なったイノベーションを引き起こす。あるいはそこを拠点に複数の地点を移動し、つぎつぎとさざ波を立てていく。

海や国境を越えて移動する建築家たちは、本来、タンポポの如く遠くに飛びゆき、たくましくその地に根づく。徐々にはあるが現地建築界の生態系を変え、さらに自分自身も進化していく(*14)。その変容の仕方はゆっくりであり、それこそジミな建築史家の観察の対象なのである。彼らを追跡する私たちも、たまには役立つことはあるのかも。

Special Feature Japanese Architects on the Asian Scene

*6 六角鬼丈

Rokkaku Kyo

写真提供/六角鬼丈計画工房



「Luxuriant City (麗城)」

2003年

設計/六角鬼丈

*7

岩本昌樹

Iwamoto Masaki

いわもと・まさき/1976年東京都生まれ。2002年東京大学大学院修士課程修了。11年同大学院博士課程単位取得退学。隈研吾建築都市設計事務所、Architects 49を経て、06年にバンク・オブ・オン・グラウンド設立。設計監理、ランドスケープ設計など幅広く活動。

写真提供/岩本昌樹



「Central Plaza Rayong」

2015年

設計/On Ground Co., Ltd.

*8

近年、国境を越えて建築の仕事に就くことがメディアに多く取り上げられている。学芸出版の『海外で建築を仕事にする1,2』(2013年、15年)、『建築ジャーナル』の特集「海外仕事術」(17年4月号)、「海外に事務所を開く」(18年6月号)など。

建築家の移動の類型

	1 冒険型 建築家 ↓	2 出張型 建築家 ↓	3 共生定住型 建築家 ↓
定義	仕事を求めて放浪	本国を中心に短期的に出張	現地に定住
本国の状況	不安定	安定	保守化
現地の状況	混乱	ある程度の安定・技術的格差	成熟
現地への効用	攪乱	権威、技術の提供	共生
介入の視点	無責任な提案	オリエンタリズム的視点	現地社会の深い理解と異質性の発見
事例	トーマス・ウォートルス、 リチャード・ブリジェンス (*15)、 ブルーノ・タウト	植民地建築家、 フランク・ロイド・ライト、 ル・コルビュジエ、 丹下健三など、 1980年代以降の 多くの日本人建築家	ジョサイア・コンドル、 アントニン・レーモンド、 クライン・ダイサム

提供/村松伸



Muramatsu Shin

村松伸

むらまつ・しん/建築史家。1954年静岡県生まれ。78年東京大学卒業。81〜84年清華大学に留学(中国・北京)。87年東京大学大学院博士課程満期退学。91〜92年ソウル大学客員研究員(韓国)。97年ハーバード大学客員研究員。2008〜09年東京大学生産技術研究所教授。09〜15年東京大学総合地球環境学研究所教授。15年〜東京大学生産技術研究所教授。おもな著書『中国建築留学記』(鹿島出版会、1985年)、『アジアン・スタイル』(17人のアジア建築家たち) (共編、ギャリリー・タイセイ、97年)、『中華中毒』(中国的空間の解剖学) (作品社、98年)、『承孝相・張永和: Works』(10×2) (監修、TOTTO出版、2004年) など。

*9 鮎川慧、「19世紀から20世紀のRIBAに所属した建築家の世界分布とその背景」、『日本建築学会計画系論文集』76(667)、1721〜1727ページ、日本建築学会、2011年。

*10 トーマス・ウォートルス
Thomas James Waters
明治初期に日本で活躍した外国人技師。1842〜98年。アイルランド生まれ。64年頃から74年まで日本に滞在。72年の銀座大火後の銀座煉瓦街の建設を指揮した。その後、上海、ニュージージーランド、アメリカに渡航。

*11 赤坂憲雄、『異人論序説』、筑摩書房、1992年。

*12 民俗学者の折口信夫が提唱(折口信夫『折口信夫全集(1)古代研究 国文学篇』、中央公論社、1995年)。

*13 敷田麻実、「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』9、79〜100ページ、北海道大学、2009年。

*14 山口裕文ほか、『雑草の自然史』たくましさの生態学、北海道大学出版会、1997年。

*15 リチャード・ブリジェンス
Richard Perkins Bridgens
幕末から明治期に日本で活躍したアメリカ人建築技師。1819〜91年。イギリス生まれ。64年に日本へ渡航し、横浜居留地内に土木建築事務所を開設。おもな作品『横浜駅』(72)、『横浜税関』(73) など。

佐伯聡子さん(手前)と
K.M.Tanさん(奥)。都内
の事務所にて撮影。



1

キッチン

「マイナスKハウス」は工場のオーナー別邸と管理人宅からなる2世帯住宅。管理人宅玄関から、キッチンを見る。キッチンカウンターは隣の住戸までフラットにつながっている。



聞き手・まとめ/橋本 純 写真/Jeremy San、山内秀鬼(ポートレート)

ニューヨークで出会った中国人建築家に誘われて

作品

「マイナスKハウス」

場所

中国・上海

設計

佐伯聡子+K.M.Tan
/KUU

建築家プロフィール

- さえき・さとこ / 1973年愛知県生まれ。97年明治大学卒業。2000年ペンシルベニア大学大学院修士課程修了。00～02年中国のMADA s.p.a.m勤務。03年～KUUとして活動開始。
- ケーエム・タン / 1964年シンガポール生まれ。92年シンガポール国立大学卒業。2000年カタルーニャ工科大学大学院修士課程修了。いくつかの設計事務所を経て、06年～KUU。
- 2006年KUU庫優建築設計有限公司を設立(上海)。13年KUU建築設計事務所を設立(東京)。おもな作品=「Thousand Island Hotel」(18)、「Relive Hillstay」(17、以上2作品は中国)、「Satay By The Bay」(12、シンガポール、Lin Hao Architectsと共同)、「ファミリアハウス」(16、東京都文京区)など。



Special Feature
Japanese
Architects on
the Asian
Scene

»» 01



特集／アジアで設計すること 1

インタビュー

佐伯聡子

K.M.Tan



2

寝室

2階の寝室。ベッド脇の小さな窓からは、キッチンカウンターが見下ろせる。照明の傘には、植木鉢を使用している。



3

中庭

キッチン脇の中庭を2階から見る。カウンターが中庭にも連続しており、隣の住戸の同スペースと視線が交錯する。晴れの日には、洗濯物を干したり、食事をとったりすることができる。



6

レンガと合板

壁はレンガを積み、白い塗装で仕上げている。壁に沿って配された合板には、電気配線が挟まれており、一部は照明器具が取り付けられている。



5

グリッド

機能ごとに部屋を与えるのではなく、グリッドに沿って、仕切ったり、つなげたりすることで、小さなスペース同士がまとまりをもって、構成されている。

4

ちゃぶ台とテーブル

3×3mグリッドを基本に、各スペースの仕切りが設けられている。写真は、ちゃぶ台が置かれた高さ350mmの小上がりがグリッドを超え、テーブルの椅子となっている様子。



7

カウンター

キッチンカウンターから、隣の住戸を見る。お互いにガラス戸を開ければ、会話ができる距離。食器や調味料をカウンター越しにシェアすることも可能。



コンピュータでの設計に違和感を感じた

——佐伯さんは、なぜ建築家を目指し、大学卒業後にアメリカの大学院に進学し、上海の設計事務所に勤めたのでしょうか。

佐伯 聡子 建築家の父を見て育ったので、自然に同じ道に進みました。明治大学の建築学科を卒業する際、指導教官だった小林正美先生の強い勧めと、私自身も国外での視野を広げたいとの思いから、ペンシルベニア大学の大学院に進学しました。

私が渡米した1990年代後半は、アメリカの大学全体がコンピュータを用いた建築設計教育に大きく方向転換した時期でしたが、私はそれに違和感を感じていました。そんなときに教員として来ていた中国人建築家マー・チン・ユン氏に誘われて、当時北京にあった彼のオフィスで2カ月ほどインターンをし、まだ建築という体系のなかで多くのことが確立されていない分、創作に可能性があると感じ、中国で働くことを決めました。その時点では日本に戻るという選択肢はありませんでした。

——独立して事務所を始めるまでの経緯をお聞かせください。

佐伯 当時の中国、上海という背景が大きかったですね。21世紀に入って中国は、景気が上昇し、いろいろな種類の仕事がたくさんありました。一方で、まだ自国のデザイナーや建築家に対する評価が低く、外国人だというだけで声がかかるような状態で、チャンスには恵まれました。

——事務所を始められた頃のこと、タンさ

んとの出会いについてお聞かせください。

佐伯 2003年に空間の「空(くう)」という意味を込めて名づけたオフィス「KU U」を立ち上げました。当時の中国は自分が建築家だと名乗れば仕事が始められるような状況で、とにかくスタート、06年にタンさんが加わって会社組織にしました。

タンさんとはフランス租界にある、当時の外国人やアーティストの溜まり場となっていた場所で出会いました。日本人女性が始めたカフェで、当時の私たちにはオアシスのような場所でした。じつは「マイナスKハウス」の施主との出会いもそのカフェでした。お互いに一緒にやれそうだと思ったのは、上海にいるとみんな大規模開発に目を向けますが、自分たちはそうではないことをやりたいと思っていたからです。そこで意気投合しました。

——設計の依頼はどのような人たちで来るのでしょうか。

佐伯&K・M・タン 最初は、声をかけてもらえれば案を出しますというやり方をしていたのですが、それではうまくいかないことがわかり、仕事を選ぶようになりまし。まず個人のクライアントを仕事の中心に据えました。デイペロツパーの大規模な仕事はさまざまな理由で止まってしまうことが多いんです。店舗の内装設計をやっていたのもそういう理由です。地に足の着いた仕事をひとつずつかたちにすることから始めて、その後は口コミです。



イラスト、写真提供/KUU

フランス租界の
KUU上海事務所

大きな建物を仕切り、他者とシェアしている。写真は以前のKUU事務所。左上に隣住戸の洗濯物。



「シェア」の
スタディ

フランス租界で調べた住み方をヒントに、住宅内におけるシェアのスタディを行った際のイラスト。「マイナスKハウス」のコンセプトにつながっている。

中国人はメディアの情報よりも、親族や近しい人間の紹介のほうを信用します。ですから信頼され彼らの人間関係の輪のなかに入れば、仕事も紹介してもらえらるし大

事にしてもらえます。彼らは設計よりも人となりを見ているようなところがあります。「あなただったらお任せします」と認めてもらうことです。

「シェア」がキーワード

——なぜフランス租界に事務所を構えたのでしょうか。

佐伯&タン 上海のなかでフランス租界は、ヒューマンスケールで路地が多くて歩いて楽しい街でした。そこで、もともとのヨーロッパ人の住まいのかたちと内部の使われ方がまったく一致しない建物を見て、私たちはそれに可能性を感じました。ここに新しい建築のつくり方があると感じ、事務所もそこに構えました。

——「マイナスKハウス」はどのような依頼だったのでしょうか。

佐伯&タン クライアントは某日本企業の

スリッパをつくっている工場のオーナーです。

この建物を設計する前に私たちは、フランス租界におけるシェアの暮らし方について調べていて、その成果を先ほどお話ししたカフェでクライアントに見てもらった機会を得ました。そうしたら彼は、おもしろいスタディだということ、このプロジェクトを興してくれたのです！まさに人と人のつながりで生まれた建築です。

フランス租界の建物は、もともとヨーロッパ人の住まいですから、大きくて、そこに中国人が何世帯も一緒に暮らしています。

中国での そのほかの 作品

2017年

臨安ホテル

写真上／共有リビング。上海から車で3時間ほどの太湖源景区に立地する民宿。築40年の民家を改修した。下／外観。オーナーは3人の若者で、新しいタイプの宿泊施設をつくりたいと依頼が来た。



Special Feature
Japanese
Architects
on
the Asian
Scene

01

2018年

千島湖ホテル

写真上／杭州市千島湖ほとりのホテルの客室。湖が一望できる。下／外観。内装と共通して、外壁はアールを取り入れたデザイン。オーナーの住宅設計の依頼から仕事が始まった。

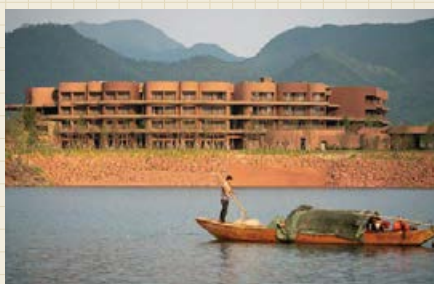


写真2点、撮影／田方方

写真2点、撮影／EICHI KANO

室内では動線も交錯していて、寝室の下がキッチン、トイレは共有、寝室を出て廊下で鉢合わせ、というようなことがふつうに起きていました。この状況は文化大革命に起因します。中国政府はブルジョアの私有財産を解放するという名目で農民を連れてきてはここに押し込みました。一方で建物としてみれば、ひと家族のために設計されたけれど何家族かで暮らすこともできる自由を示しているもので、そこからシェアをキーワードにスタディを進めました。それが、「マイナスKハウス」の原点です。

クライアントの別邸と工場の管理人家族の2世帯が入る建物ですが、3mグリッドが連続し、外から見てもどこに戸境壁があるのか、どこが何の部屋なのかがわからないうように設計しました。フランス租界から学んだ構成ですが、リサーチしていくと、西欧にも日本にも存在する形式で決して新しいものでもここ独特なものでもありませんでした。人間の居住に対する根本的な形式だと感じたからこそリサーチを進めたのです。とはいえトイレや風呂をシェアしていないのは、現代の中国人の暮らしに合

上海と東京の2拠点が良い

15年に千駄木に事務所を構え、日本に拠点を移したのはなぜですか。

佐伯&タン 中国では「マイナスKハウス」でやりたかったことを述べても、あまり反応がないんです。同じものに共感する人に出会えない。いろいろと評価はしてもらっているのですが、私たちが見てほしいところを評価してくれているわけではないなあと感じていました。この違和感は今後20年30年と滞在していたとしても埋まるものではないでしょう。私たちふたりは、中国、

上海ではいつまでも精神的アウトサイダーであるかもしれません。

佐伯 むしろきちんと建築をつくるんだったら今は日本のほうがいいんじゃないかと思つたので東京を拠点にしました。私にとつては結局グルッとまわってきたことになりました。タンさんは建築を含め日本文化に興味があり、合っているように思います。

佐伯&タン 将来また別の場所に移動する可能性もありますが、今のところ2拠点はいいバランスで、日本と中国、それぞれのいいところと問題点がよく見えておもしろいのです。千駄木にしたのは、ここが上海のフランス租界にちよつと似ていたから(笑)。

——現在、動いているプロジェクトについてお聞かせください。

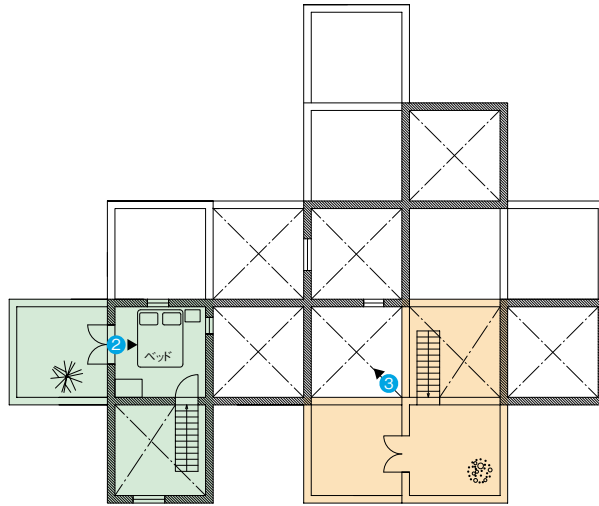
佐伯&タン 住宅は、数年前から政府が規制をかけたため、開発熱はリゾート物件に移っています。私たちの仕事も宿泊施設が多くなりました。リゾートでは個性が求められますから、違ったものがほしいというクライアントに対して、うまく受け入れられています。規模は大きいのですが、仕事のスパンが長く何期かにわたって続くので、様子を見ながらふたりだけで動かしています。

じつはそのなかで集合住宅のプロジェクトを提案していて、「マイナスKハウス」の発展形ができるかもしれません。異なる規模でできたらおもしろいと思っています。

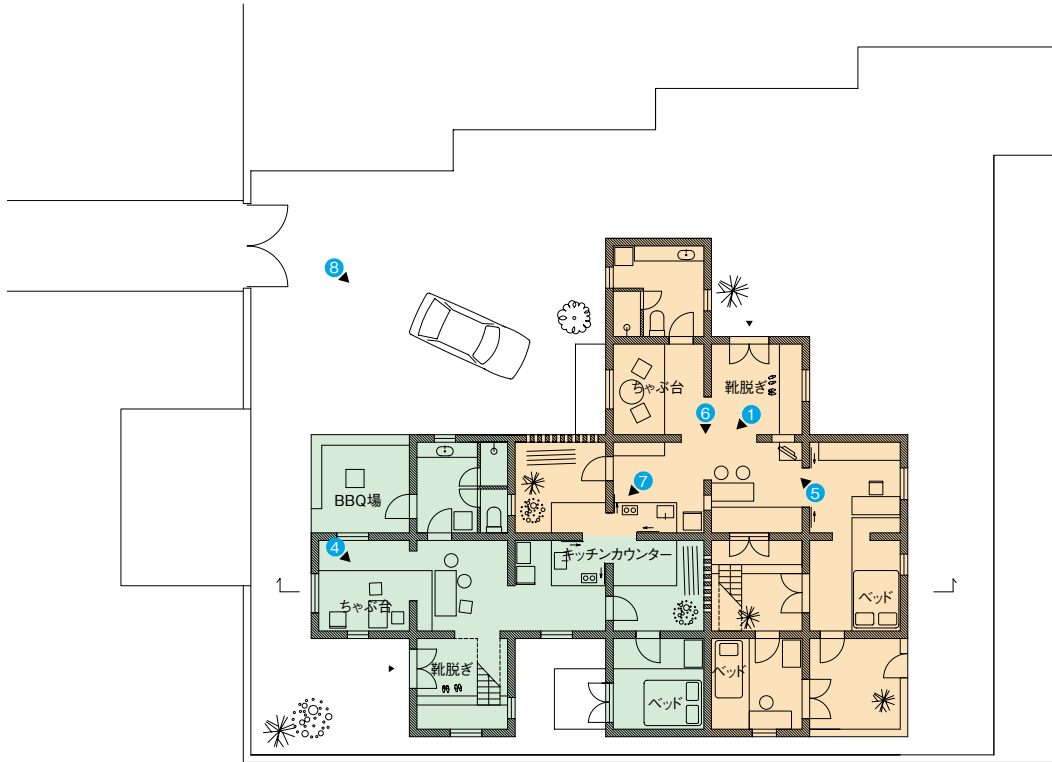
平面図

オーナー宅(夫婦)
 管理人宅(夫婦+子ども1人)

0 1 2m
1/250



2F

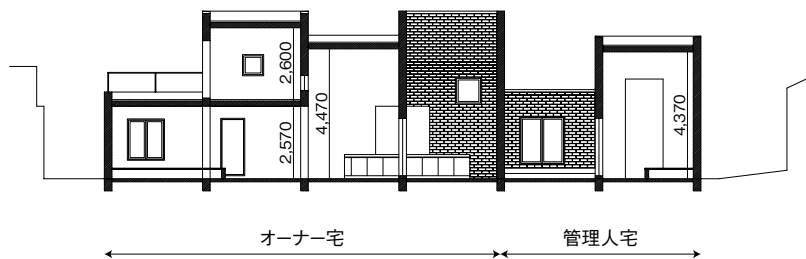


1F

断面図

0 1 2m

1/250



まとめ

世界は 人と人との つながりでできている

文／橋本純

僕

が今回KUUと話してみたかったのは、彼らが、東京、シンガポール、バルセロナ、フィラデルフィア、上海、と世界のあちこちを経験し、その経験のなかからなんか建築を思考するうえでの共通項（＝文明的なるもの）のようなものを見出しているのではないか、それは人類の経験としてなんなのか、ということからであった。

佐伯さんは1990年代後半にアメリカに留学し、最先端のコンピューティショナル・デザインに触れるがそれに違和感をもち、

インターンで訪れた中国にリアリティを感じて上海で働きはじめた。アメリカが開発したグローバル言語よりも、はるかに古くからあるグローバル建築言語である手積みレンガのほうにリアリティを感じている。

KUUのふたりは、それぞれアメリカとバルセロナで西欧の建築理論を学び、中国社会に飛び込んだ。そこでは自分たちが勉強したグローバル言語だったはずの西歐学問で中国の現実に向きあっても問題が解決しないことを知る。そこは西歐発のグローバル言語なんて関係ない共同体のヒューマ

そ

ン・コミュニケーションの世界だった。そしてそこで彼らも変質し、やがて「マイナスKハウス」に至る。

んなKUUに出会ったのは、僕がかつて『JA』の編集長をしていたときである。東日本大震災の直後、82号で「日本の都市空間2011」を企画した際、日本の再生のために魅力的な都市空間のアイデアを彼らにも提案してもらった。その提案は「マイナスKハウス」の発展形で、建築面積が7650㎡もある、かつての中国の名士の家に95世帯240人

が住むというものだった。内と外もない全員が家族のような空間。今回この原稿を書くにあたって読み直しながら、かつて菊竹清訓さんからうかがった久留米の大庄屋だった実家の話と妙に符合した。近世の共同体というのは、洋の東西を問わず、こうした人のまとまりを大事にしてきた。

そうか、最後は人と人とのつながりに戻ってくるのか、と思った。グローバル言語としてのヒューマン・コミュニケーション。あたりまえのことに回帰している。世界は人と人とのつながりでできている。



8

外観

汚れが目立たないよう、外壁下部は塗装せず、白塗装からレンガの地色へとグラデーションにしている。

「マイナスKハウス」

Minus K House

建築概要

所在地	中華人民共和国上海市南匯
主要用途	2世帯住宅
設計	KUU
構造	レンガ組積造
施工	孫飛組
階数	地上2階
敷地面積	521.48㎡
建築面積	158.44㎡
延床面積	169.00㎡ (1F:158.44㎡、2F:10.56㎡)
設計期間	2009年8月～10月
工事期間	2009年11月～2010年5月

おもな外部仕上げ

屋根	プレキャストコンクリートスラブ、モルタル、一部砂利敷き
外壁	有孔レンガブロック
開口部	木製建具
外構	車両用コンクリートブロック

おもな内部仕上げ

床	セメント系セルフレベリング材＋カラーモルタル、一部オーク木材フローリング
壁	有孔レンガブロック EP
天井	プレキャストコンクリートスラブ EP

施工中

中国は人口が多いため、マンパワーを使うレンガ積みが安価で一般的な工法である。



写真提供／KUU

↓川辺直哉さん。都内事務所の模型棚の前にて。



←サービスアパートメント「TAMASA」外観。500mm角の柱と梁がフレームのように建物全体を覆う。



3階の階段まわり。ガラスブロックなどのインテリアが、フレーム間を埋める。

カンボジアの建設事情の調査から始まった

作品	「TAMASA」	場所	カンボジア・プノンペン	設計	川辺直哉
----	----------	----	-------------	----	------

建築家プロフィール

かわべ・なおや／1970年神奈川県生まれ。94年東京理科大学卒業。96年東京藝術大学大学院修士課程修了。97～2001年石田敏明建築設計事務所。02年川辺直哉建築設計事務所設立。おもな作品＝「Sunrise Japan Hospital Phnom Penh」(16)、「Cambodia Phnom Penh Sakura Residence St.334」(16)、以上2作品はカンボジア)、「目白下落合ハウス」(18、東京都新宿区)、「中田の自邸」(16、神奈川県横浜市) など。



Special Feature
Japanese
Architects on
the Asian
Scene



02



特集／アジアで設計するということ 2

インタビュー

川辺直哉

聞き手・まとめ／加藤 純 写真／川辺明伸

1 住戸を貫通するテーブル



2階の住戸 (type 23) と共用部は、ひとつのテーブルを共有する。奥にミニキッチンを設置。つくった料理を持ち出して、友人と一緒に食べることができる。



2 共用部に開かれたキッチンの窓



3階の住戸 (type 36) のキッチンには、共用部に面して、外開きの窓を設計した。窓を開けばカウンターキッチンとなり、ほかの住戸にも面する共用部をダイニングとして使える。



3 屋上に面したリビング



屋上階の住戸 (type 41)。写真手前のダイニングと奥のリビングには段差がある。リビングの奥に設けられた木製折戸を開け放すと、テラス・プールとつながる。

4 ガラス壁で連なるキッチン



2階の住戸 (type 27・28) は、入口の壁がガラス張り。両住戸のキッチンが連続し、まるで共用キッチンのように。キッチン奥にカーテンが設置され、プライバシーも守られる。



8

有孔ブロック壁の住戸

3階住戸 (type 32) の寝室。角部屋の両壁面の一部を現地で一般的に利用される有孔ブロックで構成。内側にガラス壁も設置。強い日差しを遮りつつ、眺望を確保している。



Special Feature
Japanese Architects on
the Asian Scene

02

5

メゾネットタイプ



屋上階の6住戸はすべて、メゾネットタイプ。写真はtype 42。正面中央がキッチン、手前がダイニング。右のカーテン裏には、冷蔵庫と洗濯機が隠されている。上部がロフト。

6

ガラス張りの住戸



2階の住戸 (type 27)。写真はリビング。奥に寝室。北側の開けた土地に面しているため、ガラス張りで開放的なつくりとした。

7

ガラスブロックの住戸



3階の住戸 (type 35) のリビング。廊下など、人通りの多い共用部と住戸の境界はガラスブロックで構成。

10

カフェ (1階)

1階のカフェ。奥の厨房の壁面は木のタイル貼り。カフェは滞在者のみならず、一般客も利用可能。



9

屋外との段差

1階のカフェを外から見ると。雨季には洪水が発生する地域のため、1階の床レベルを1mほど上げている。





周囲の様子



国際空港への幹線道路に面し、開発が進む地区に立地。低層の建物が立ち並ぶなか、RC造のフレームが際立つ。

そのほかの共用部



11

屋上テラス

滞在者が自由に使える屋上のテラスとプール。右手はバー。カンボジアの夜景を眺めながら楽しむことができる。

施工中



鉄筋を溶接してつくられた、金槌。現場にない道具は、作業員が自ら手づくりすることも多い。



まずは、躯体が打設される。RC造のキッチンカウンター（左手前）を、一緒に立ち上げることがポイント。



躯体のフレームのあいだを、有孔ブロックで埋める。作業員が現場で作成したものを積む。



住戸と共有部の境界にある窓。コンクリートブロックをすべて積み上げてから、開口部を打ち抜いている。

写真4点、提供／川辺直哉建築設計事務所

躯体とインテリアのスケールを切り離す

——カンボジアでの活動に至った経緯を教えてください。

川辺直哉 大学時代の後輩が住宅メーカーのタマホームに勤務し、海外プロジェクトを始めるためのリサーチをしていました。カンボジアに絞ったところで連絡をもらい、どこに何をつくるのか定まっていないうちに、後輩と一緒に何度か訪れ、建設事業や住宅供給の状況、戸建住宅の分譲地や集合住宅を視察し、レポートを作成しました。

いくつかの候補地のなかで、空港から車で約15分とアクセスがよく、テニスや乗馬ができるスポーツ施設が隣接する敷地で事業ができることを見込み、プロジェクトがスタートし、その結果、サービスアパートメント「TAMASA」が実現しました。ホテルサービスのある集合住宅のプログラムで、現在は一部をホテルとしても運営しています。工場などの施設を優先的に建てられる経済特区に通う海外からの利用者が多く、彼らは数日から数週間にわたって

滞在します。

——「TAMASA」の特徴は、どこにありますか。

川辺 日本で求められる構造設計のスペックは、地震がほとんどない現地ではオーバースペックです。それを逆手にとって日本の基準を適用し、現地で信頼を得ている日本の設計であることをアピールするねらいがありました。

カンボジアでは、高い建物でも柱は細いことが多いのですが、あえて500mm角として強調しています。ラーメン構造の柱と梁の断面を同じサイズにしたフレームをつくり、水平方向も垂直方向もフラットな関係で積み上げていくようにしました。

また天井高を大きくとり、躯体とインテリアのスケールをあえて離しました。内装工事の精度はそれほど望めないなかで躯体の強さを前面に出すことで、インテリアの粗さが消えていくのではないかと考えたのです。

そのフレームの中では住戸と共用部との境界をあいまいにしました。共用部に面した側をガラス壁にしたうえでキッチンや洗面所を配し、仕上げを連続させています。

カーテンを閉めて視線を遮ることもできませんが、開けていれば共用部も自分のものとして感じられ、利用者同士の接点が生まれる機会は増えると思います。現場で作成した有孔ブロックを一部に使い、半屋外のスペースもつくりました。

——現場監理の体制は、どのように整えられましたか。

川辺 施工を担当したローカルのゼネコンの社長は日本での滞在経験があり、日本語が通じました。現場監理はおもに英語でのコミュニケーションでしたが、設備の協力業者が日系の会社で担当者が日本人だった

ので、現場での疑問点のやりとりは設備担当者を通して行うこともできました。監理で現場に行く頻度は時期によりませんが、1回につき1週間から10日ほど、当時の現場担当者が滞在しました。

現地ではラーメン構造の柱梁のあいだをブロックで埋めていき、必要な箇所壁に穴をあけて開口部をつくる方法をとっていました。そして、モルタルを塗ってからペンキで仕上げます。

思っていたよりもRC造躯体のコンクリート打設まではスムーズに進みましたが、仕上げの工事ではわれわれが考えている納まりや仕上がりとはずいぶん苦勞しました。そこで内装工事の段階では現地でアイソメ図などを描きながら、直接指示を出していきました。

事務所スタッフが現地に2年間滞在

——スタッフの奥田さんは担当者として、現地に滞在されました。どのような様子でしたか。

奥田晃大 2年ほど滞在して現場に足を運

ぶ毎日でしたが、とくに生活で困ったことはありません。クメール語で挨拶するなど、作業員に寄り添うように心がけていました。工場の質という点で文化の違いを感じ

カンボジアでの そのほかの 作品

Special Feature
Japanese Architects on
the Asian Scene

02

2016年

Sunrise Japan Hospital Phnom Penh

日本式医療を提供する国際病院。写真上／建物外観。都市中心部から川を挟んだ手前にある。下／待合スペース。



2014年に改修、16年にカフェを改修

テナントビルの改修

写真は共用部。新たに積んだレンガにガラスをはめ込み、共用部と室を一体的につないだ。



2016年

バーの改修

日本人が経営するバー。元の日本料理屋に使われていた竹を黒く塗り、インテリアとして再利用。



奥田晃大(川辺直哉建築設計事務所所属)



Okuda Akihiro

ました。昨日までは畑仕事をしていたような人たちも多いので、器用な人がいても建物をきちんとつくった経験がありません。現場監督の話では、人を育てても海外に出稼ぎに出でしまい、彼らが戻ってきたときの体制が整えられていないそうです。自国での技術が育たず、精度も上がっていかないことは課題となっています。

——現地での経験は、設計にどのような影響を及ぼしましたか。

川辺 独立前は設計段階で細部まで検討し、現場でもつくり込もうとしていました。ですがそうしたスタイルはプロジェクトの規模が大きくなり、施工期間が長くなるほど難しくなります。

それで、施工精度に頼らなくても、当初のコンセプトを残す考え方にシフトしてい

きました。躯体、設備、仕上げ、家具といった建築を構成する要素すべてをコントロールしなければならぬという呪縛から解かれ、切り分けて考えられるようになったのです。

カンボジアの経験からはさらに、その時々状況をまずは受け入れるようになりました。たとえば何か予期せぬ出来事を監督から聞くと、以前であれば「なぜそうなるのか」と返していましたが、「それならこうしましょう」と、ギャップを次に生かしていくようになりました。海外でプロジェクトを進めるときには、文化やコミュニケーションが違うため、建築のつくり方や根本的な思想を変えなければいけません。

——現地ではかに手がけたプロジェクトについて、教えてください。

川辺 「T A M A S A」と同時期に、プノンペンの市街地に17階建てのサーブیسアパートメントの建物を設計しました。また高度医療を伴う国際病院を展開する日本企業からホームページ経由でコンタクトがあり、病院の設計に携わりました。

それらの進捗のあいだを縫うように、カ

フェヤバーの改修、オフィス、サロンの仕事をしました。事務所を構えていると、現地の業者などから口コミ的に紹介がありますね。

ただし、予算も時間も限られた案件では、

アジアと日本は同じ距離感にある

——現在、海外プロジェクトはありますか。

川辺 今は実際に動いているプロジェクトはありませんが、カンボジアでいくつかの案件について相談を受けています。ある程度の規模と期間のプロジェクトがまとまれば、また現地事務所を置くことになるでしょう。

私は軸足を日本に置いていますし、「海外進出しよう」という意気込みを抱いてきたわけではありません。

でも、技術が発展途上にあるアジアの国々では、建築への関心度や熱量が高いので、チャンスは最大限に生かしていきたいですね。

トータルに完成されたデザインが難しいので、すでにあるものを使うしかありません。狭い選択肢のなかでは、突破口を見極めることが質につながる、という勉強になりました。

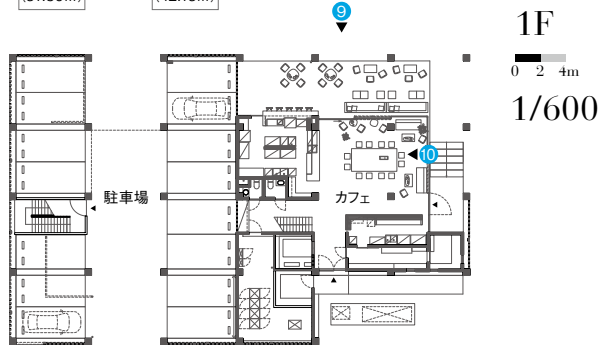
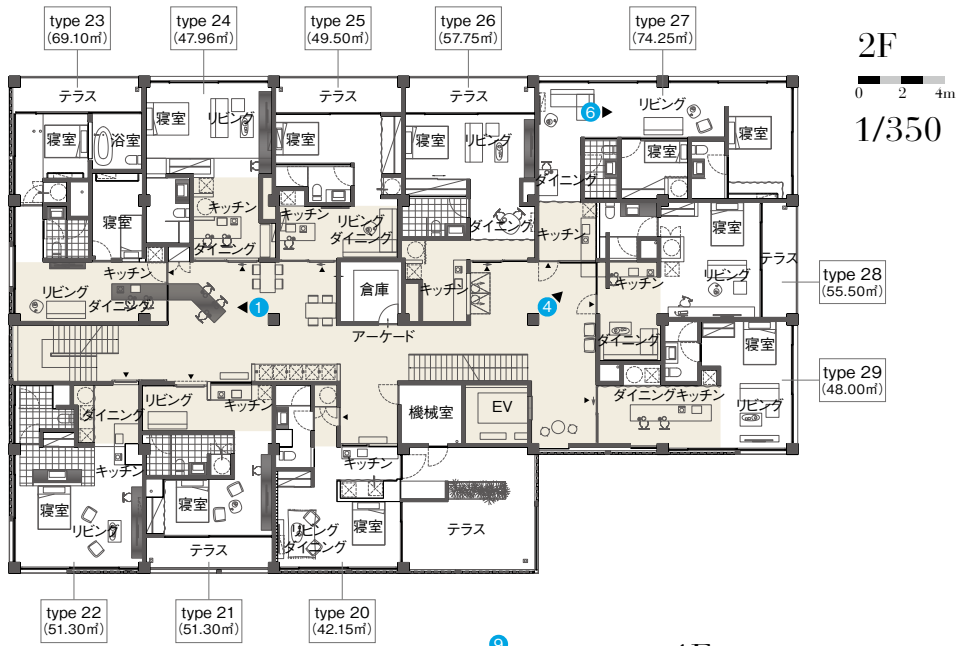
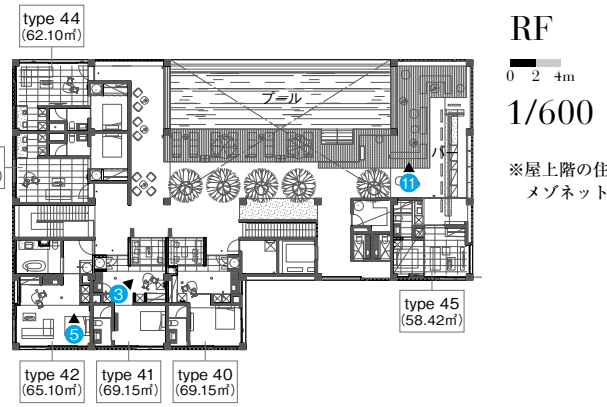
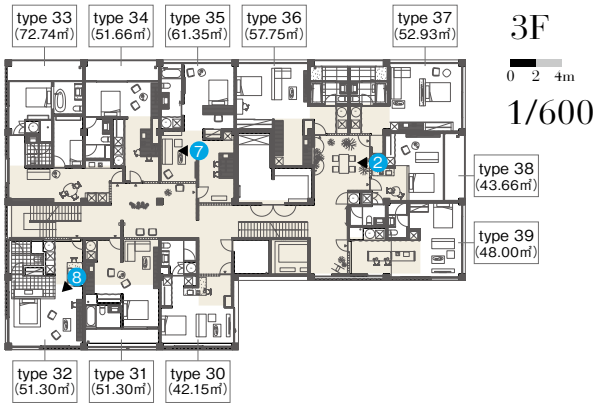
——海外で仕事をしたいと考えている方へのメッセージをお願いします。

川辺 自分がやりたいことは、口にしたいほうがよいでしょう。私は人に会って、なんかの可能性がありそうだと感じると、「東京以外の日本各地やアジアで仕事をしてみたい」というように気持ちを表してきました。そうすると、実現する道に接点が生まれていくと思います。

今、海外は遠くから眺めるだけの存在でなく、日本と同じ距離感にあります。気負わずにフラットな関係で見えていくと、仕事のフィールドが広がるはずです。

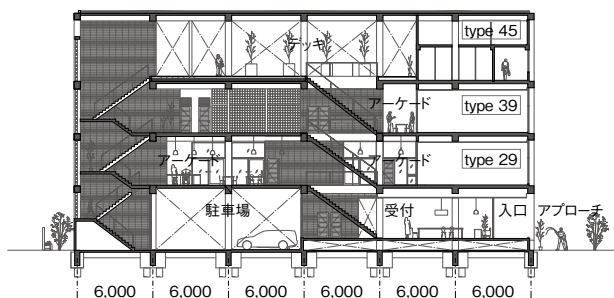
平面図

住戸と共用部の境界があいまいな範囲



断面図

0 2 4m
1/600



まとめ

「プノンペン」がビルディングタイプ

文／加藤純

集

合住宅や戸建住宅のプロジェクトを多く手がける、川辺直哉さん。彼の事務所のホームページでは「集合住宅」「住宅」とともに、「プノンペン」がビルディングタイプのように項目のひとつとなっている。建築家としての実績を積み、活動の幅をさらに広げたいタイミンングで受けた相談。つねに複数のプロジェクトが進み、スタッフも抱えて事務所を運営するなかで、実現の可能性が0か100と極端なコンペ案件ではなく、現地のリサーチ

から入り建築物を実現させていく話は川辺さんにとって現実的であった。同時に、経験のある建築家の眼をおとした観察と考察は、クライアントにとって現実的な方向性と提案を導く強力な一助となったはずだ。

川辺さんはプロジェクトが本格的に始まるに際して、現地の事情を加味して設計することができた。なかでも、コンセプトにかかわる躯体フレームのつくり方を規定して、建築の隅々にまで行き渡るルールとしたことは大きい。日本のものともカンボジ

アのものともいえない微妙なスケール感をもち、立体的に広がるフレームは、多少の施工誤差や納まりの粗さに左右されない空間の質を保つ。同時に、外部と内部、共用部と住戸が混ざりあい、多彩なインテリアが併存することを受け容れる。それは、多様な国籍と文化をもつ宿泊者がリピーターとして利用することにつながる。

そして工事が進むうちに、川辺さんの設計に対するスタンスが変わったことは興味深い。設計図作成か

ら竣工まで気を張り詰め、細部までつくり込むことが全体の質とコンセプトを決定づけるという想いはカンボジア以前から弱まっていたという。その水解はさらに進み、施工精度が担保できない状況のもとで打開策を見極め、臨機応変に別のアプローチをとりながらコンセプトを実現させていくタフさを、川辺さんは身につけていった。より懐の深くなった川辺事務所という器に、新たな地名の引き出しが加わるのが楽しみである。



夜景。各住戸のにぎわいが、フレームのあいだからもれ出す。

「TAMASA」

建築概要

所在地	No. 2300, St. 2004, Toeuk Thla Commune, Sen Sok District, Phnom Penh, Cambodia
主要用途	サービスアパートメント、ホテル
設計	川辺直哉建築設計事務所
構造設計	多田脩二構造設計事務所
構造	鉄筋コンクリート造
施工	S.O.M.コーポレーション
階数	地上4階
敷地面積	2,113㎡
建築面積	711.00㎡
延床面積	2,646㎡ (1F:711㎡、2F:711㎡、 3F:711㎡、RF:513㎡)
設計期間	2011年10月～2012年6月
工事期間	2012年7月～2013年8月

おもな外部仕上げ

屋根	アスファルト防水+押えコンクリート
外壁	モルタル金ごて仕上げ、有孔ブロック
開口部	アルミサッシ
外構	舗装ブロック、植栽

おもな内部仕上げ

居室	
床	モルタル金ごて押さえ、 タイル(水まわり)
壁	木壁(間仕切り)、 CB+モルタル 塗装、 ガラスブロック(3F)
天井	PB 塗装(吊り天井)
共用部	
床	モルタル金ごて押さえ
壁	木壁(間仕切り)、 CB+モルタル 塗装、 ガラスブロック(3F)
天井	躯体現し



写真左上／「ニャチャンの住宅」外観（北東）。左下／屋上。ゆるやかな勾配を階段状にし、緑を配している。



岩元真明さん。九州大学大橋キャンパスの校舎にて。

ベトナムのローテックに先進性をみて

作品

「ニャチャンの住宅」

場所

ベトナム・ニャチャン

設計

ヴォ・チョン・ギア+
岩元真明

建築家プロフィール

いわもと・まさあき／1982年東京都生まれ。2006年に東京大学卒業。06～07年ドイツのシュトゥットガルト大学研究員。08年東京大学大学院修士課程修了。08～11年難波和彦+界工作舎。11～15年にベトナムにて、ヴォ・チョン・ギア・アーキテクトのパートナー。15年～ICADA共同代表。16年～九州大学助教、同大学の環境設計グローバル・ハブに所属。おもな作品＝「S House 2」（14）、「House for Trees」（14、以上2作品はベトナム）、「新クメール建築と日本」会場構成（17、カンボジア）、「節穴の家」（17、広島県福山市）など。



Special Feature
Japanese
Architects on
the Asian
Scene



03



特集／アジアで設計するということ 3

インタビュー

岩元真明

聞き手・まとめ／杉前政樹 写真／大木宏之、遠藤秀一（ポートレート）



中庭のまわりに部屋を配置

中庭（水庭）

一番大きな中庭は水庭となっている。右側にリビング。左側にダイニング。



ダイニング

1階ダイニング。右上上部は2階中庭の壁面。レンガの隙間から採光。



リビング

1階リビング。レンガ壁は2重となっており、輻射熱をカットし防水性を高める。



そのほかの部屋

寝室

2階「寝室3」。左奥にテラス、右奥に中庭。中央扉奥は収納室と浴室。



浴室

2階「寝室3」の浴室。手前に洗面台とシャワースペース、奥に中庭が見える。



中庭

1階中庭からの見上げ。室内外とも、レンガ壁を白く塗装した仕上げ。



ドイツのハイテク建築からアジア熱帯のジェネリック・シテイへ

—— 学生時代はどのようなことを学ばれていましたか。

岩元真明 学部は難波和彦研究室でサステイナブルな建築をテーマに研究をしておりまして、修士課程のときに休学してシユトウツトガルト大学に行きました。ヴェルナー・ゾーベック教授の自邸「R128」（2000年）は、美術館のような全面ガラス張りで、しかも環境性能も高いハイテク建築。それが純粹にかっこいいと思い、1年間留学しました。

一度帰国し、さらにベルリンのザウアブルフ・ハットンの建築事務所で半年間インターン。修士論文では、ペンヤミンとレム・コールハースとの比較研究について論じました。

—— ドイツで最先端の技術を学んで、なぜまたベトナムへ。

岩元 修士を出て難波和彦+界工作舎に入り、日本の工務店の技術力を生かした設計現場で実務経験を3年間積みました。そこでは、非常に緻密で、機械的な美学を学びました。ですので今度は逆に、もっと荒っぽくて、乱暴なものを許容するところに出てみたくなりました。そこで僕は、レム・コールハースが「ジェネリック・シテイ」と名づけた新興国の都市、その最も典型的なアジアの熱帯の都市から、世のなかを見たいと思うようになったのです。

ベトナムを選んだのは、08年に、東京大学とホーチミン建築大学のワークショッップに参加しまして、現地を訪れたときの人々

日本人を50人ぐらい呼びたい

—— ギアさんは東京大学の内藤廣さんの研究室で学んで、今や世界的に有名な建築家ですよね。当時はすでによく知られていたのでしょうか。

岩元 あまり知られていませんでした。でも現地に行ってみたら、とりわけ竹を構造材にした建築がすばらしく、ギアさんと働くことに決めました。11年の秋のことです。「ほかにも日本人を連れてきてくれ」と言われたので、難波研の後輩の西島光輔さんを誘い、さらに妻の知人で、デザインムジカで働いていた大西邦子さんという方に、初

の印象が前向きでとてもよかったです。「ベトナムで働くのもおもしろそうだなあ」と触れまわっていたら、大学時代のベトナム人の後輩から、ヴォ・チョン・ギアさん

を紹介されました。それでお会いしたところ「ベトナムの建築界を変えたいから、ぜひ来てください」と熱弁を振るわれ、本当に驚きました。

対面にもかかわらず「ホーチミンで働きませんか」と声をかけてみたところ、翌日に「行きます」と。

—— みなさんフットワークがすばらしいですね。ではベトナムに渡って、最初に何から始めたのでしょうか。

岩元 いきなりヴォ・チョン・ギア・アーキテクトのホーチミン事務所の所長に就いて、基本設計が完了していた幼稚園や住宅などのプロジェクトを引き継ぎました。とにかく仕事はたくさんあって、しかもタイムスケジュールがきびしい。1週間でコン

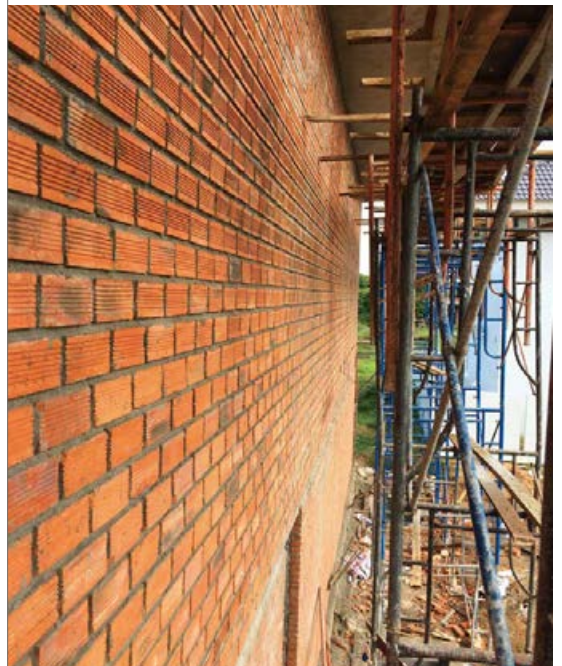
施工中



↓
背後の山、前面の海に挟まれた土地。



↓
躯体の打設。



↓
レンガ積み。施工誤差が大きいとやり直すことも。



↓
作業員は現場周囲に住み込む。食事の一コマ。

写真4点、提供／岩元真明

セプト設計を終わらせることも多く、建設現場に職人が集まらなかったり、レンガを積むだけで10〜15cmもの誤差が出てやり直したり。ですから設計も、あらかじめ施工技術の粗さを許容するディテールにして、見せ場だけはきっちり納め、施工がダメならば壊してやり直すことを辞さないようになっていきましたね。

——ベトナムでは建築家の職能は確立されていると思いませんか。

岩元 実務家養成機関としての建築大学はありますが、コンセプトから考えて、施主の求める以上のものを提案して社会に貢献するという訓練はされていないと思います。ギアさんは日本から若い建築家をできれば50人ぐらい呼んで、ベトナムの建築界をレベルアップしたいと考えている。設計料についても、当時ギアさんの事務所では、平

米あたり100万ドン（約50ドル）と定め、コンセプト設計で30%、基本設計で30%、実施設計と監理で残りといった具合に、3段階に分けていただいています。

——「ニャチャンの住宅」について解説していただけますか。

岩元 これは僕がベトナムで最後に携わったプロジェクトです。クライアントはスロークライフ的な感性をもった裕福な独身男性で、「緑が好きなので、広い庭がある平屋の大きな家に住みたい」とおっしゃる。敷地は約150坪と広めなのですが、要求を満たすには狭い。そこで建物全体を片流れの低層に抑えて、屋上全体に豊かな植栽をストライプ状に施しました。

なぜストライプ状かというと、大きな樹木を植えるには深い土層が必要ですので、植栽の下部には天井高を抑えられる収納や

浴室が適していて、そのプラン配置の結果、帯状になったというのが理由のひとつ。と同時に僕のなかで考えていたのは、レム・コールハースが摩天楼を横倒しにしてラ・

ヴィレット公園のプランにしたように、ベトナムの典型的な長屋を横倒しにしたら、ストライプ状の平面構成になった、というおもしろさを潜ませることでした。

ないものはつくるしかない

——ベトナムでの設計活動で学んだことは何ですか。

岩元 ないものは自分でつくるおもしろさですね。たとえばベトナムではコンクリート柱にレンガ壁が一般的で、鉄筋コンクリートで壁を打つことがないので、Pコンがない(笑)。仕方なく別の資材を転用して自作しました。照明や衛生器具もカタログがないので、市場で探して調達しなければな

りません。建築基準法も日本ほど細かく決まっていないので、たとえば幼稚園を設計するとき、安全で快適にするには柵の高さを何cmにするかとか、すべて自分で責任をもって決めなければいけません。自由だけれど大変でした。

——その体験は設計活動にどう影響しましたか。

岩元 日本で設計した「節穴の家」は、高

ベトナムでの そのほかの 作品

2013年、ホーチミン

Factory Office Renovation

先進国に輸出する衣類の裁縫工場の改修。手前がオフィス、奥が工場。



2014年、ホーチミン

House for Trees

緑が少ない密集地に立つ、植木鉢状の住宅。外壁は竹製枠を使った打放し。



2013年、ビンホア

Farming Kindergarten

靴工場に隣接する幼稚園。一筆書きに連なる屋上を緑化。一部は菜園。



2014年、ロンアン

S House 2

予算4,000ドル、耐久年数30年、建方3時間のローコスト住宅供給プロジェクト。壁と天井材には、周囲に自生するヤシの葉を利用。



日本での 作品

2017年、広島県福山市

節穴の家

写真右／節の部分を取り抜いて、トップライトとした。左／積層前のCLTの単層板を屋根材に使用。



名な現代美術画家の方がクライアント。奥さまが農作業などをするための約30坪の小屋を、800万円程度でつくりたいと聞いて、これはとてもおもしろいプロジェクトになる予感がしました。

構造家の荒木美香さんの計算によると、3cm厚の合板を切妻に組んで引張材を入れれば、それだけで屋根が構成できる。ただし3・6×1mのサイズの合板が必要で、特注すると逆に高価になってしまいます。最近話題のCLT（直交集成板）の工場を

見学したのですが、これも高い。そこで積層させる前段階の単層板を売ってもらえないかと交渉したところ、たいへん安く入手できました。「でもこれ、節が抜けていても大丈夫？」と心配されたので、それが逆におもしろいと思い、最初から節に穴をあけて、天井から点々と光が漏れるスカイライトにしました。

貧しさの象徴のような節を、美学的な価値に転換しようという発想です。引張材も鉄鋼は高いので、麻のロープにしました。

これも、なるべく安価で手に入るものを使う、ギアさんの設計流儀のひとつです。——これからの活動予定と、最後にこれからアジアに出ようと考えている方へのアドバイスを。

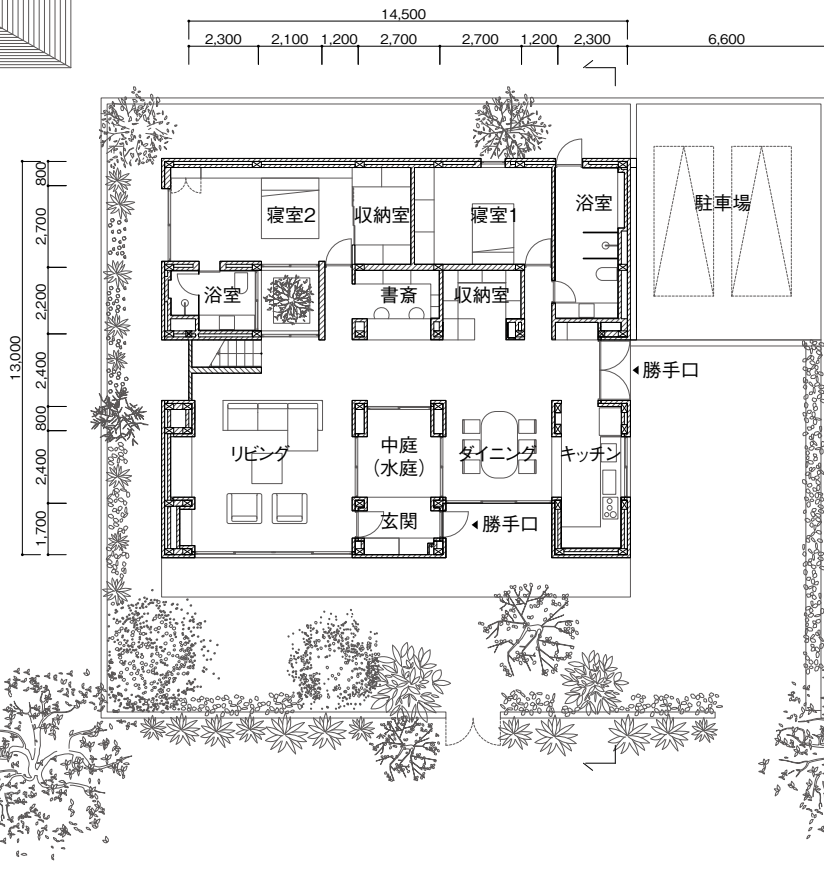
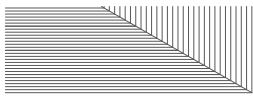
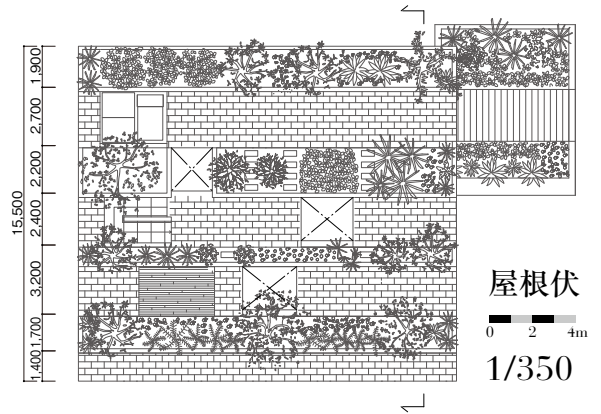
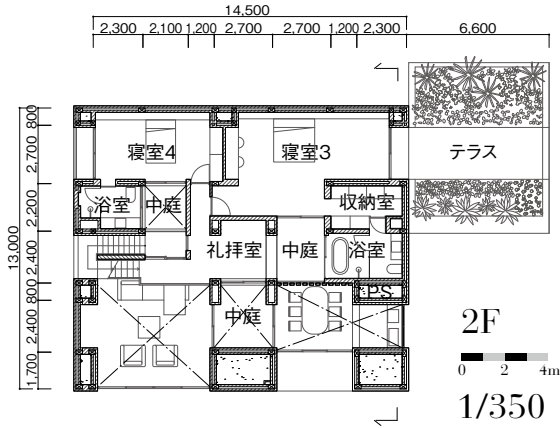
岩元 2017年からはカンボジアの木造農村住宅を、デジタルファブリケーションを応用して改良するプロジェクトを始めています。調査で現地の方と交流しているうちに、設計の話が舞い込んでくることもあるかもしれません。

ですから、マーケットがあるから海外に行くのではなく、自分ももっている知識なり能力が「一番求められている場所」にまっすぐ行ってみるのがいいのではないのでしょうか。誰も助けてくれない場所に外国人がひとりで行っても成果は出にくいでしょう。設計はモノを輸出するのとは違って、文化の交流が欠かせないと思います。

まずは現地の人とつながること。そのときに大切なのは、好奇心をもちつづけることだと思います。



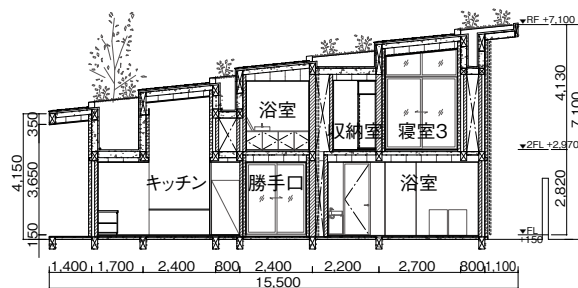
平面図



断面図

0 1 2m

1/250





建物外観と背後の山並み。

「ニャチャンの住宅」

House in Nha Trang

建築概要	
所在地	Vietnam, Khanh Hoa Province, Nha Trang
主要用途	住宅
家族構成	男性+両親
設計	Vo Trong Nghia+岩元真明
構造	鉄筋コンクリート造
施工	Thai Minh Construct and Trade Company
階数	地上2階
敷地面積	492.0㎡
建築面積	235.2㎡
延床面積	276.77㎡
設計期間	2013年12月~2014年7月
工事期間	2014年7月~2015年3月
おもな外部仕上げ	
屋根	タイル t=10mm、屋上緑化
外壁	レンガ t=100mm AE
開口部	アルミ製建具
外構	タイル t=10mm
おもな内部仕上げ	
床	タイル t=10mm
壁	レンガ t=100mm EP
天井	PB t=9.5mm EP

岩

元さんがヴォ・チョン・ギア氏のパートナーとしてベトナムで活動した4年間で、実際に立ったのは10作品ほど。ナイキの靴を製造する工場に附属する幼稚園や欧米の高級ブランドコートを縫製する工場のリノベーション、メコン川流域の農村低所得者住宅シリーズなどを担当しているが、なかでも注目なのは「House for Trees」(31ページ参照)である。住宅密集地のエアポケット的な敷地に、直方体の住宅が分棟して連なる。屋上の樹

木がアンバランスなまでに立派で、まるで巨大な植木鉢の中に人が住んでいるようである。

パ

ートナーという立場で共同設計しているため、各作品のどこまでがギア氏の考えで、どこからが岩元さんの考えなのかを線引きするのは難しい。だが、たとえば農村低所得者住宅のプロジエクトでは、ローコストで丈夫な構造物をつくる難波研でのノウハウが生かされており、「House for Trees」では、ベトナムで

は珍しいコンクリート壁構造を施工、裁縫工場のリノベーションでは、管理職のオフィスと工場の仕切りをガラス張りにして、さらに労働者にも外の美しい景色が見えるように改良を提案している。ギア氏の建築の基本的なコンセプトは、竹などの自然素材を合理的に用いて、緑をふんだんに取り入れるものであったが、岩元さんの加入によって、技術的にも空間構成的にも、さらに表現の幅が広がったといえるであろう。住宅環境のエコ性能にしても、ハイテク

の機械的な美学にしても、過剰に突き詰めすぎると、建築はとたんに息苦しくなる。岩元さんは最先端の技術や思想を学びつつも、それらを全面的に押し出すのではなく、あくまで住み手から「求められている空間」を生み出すために技術力を貢献させようとする。ベトナム、福岡、そしてカンボジア。求められている場所に行き、必要とされる技術を柔軟に使い分けていく建築家は、これからもそのフィールドを軽やかに広げていくであろう。

まとめ

求められている
場所に
行くこと

文/杉前政樹

「シャンティニケタンの家」の1階ホール。置かれている家具も設計した。



佐藤研吾さん。改修設計・施工を担当した東京・北千住の「BUoYアートセンター」にて。

インド・シャンティニケタンの学校を訪ねて

作品 「シャンティニケタンの家」	場所 インド・シャンティニケタン	設計 佐藤研吾
---------------------	---------------------	------------

建築家プロフィール

さとう・けんご／1989年神奈川県生まれ。2011年東京大学卒業。13年早稲田大学大学院修士課程修了。13年～STUDIO GAYA。15年～インドのパロダ・デザインアカデミー助教。15年～東京大学大学院博士課程在籍。16年～^{敬称して}歓藍社。17年～In-Field Studio主宰。18年～福島県大玉村教育委員会の地域おこし協力隊。おもな作品＝「鳥山翼保育園」(16、STUDIO GAYAで担当)、「BUoYアートセンター」(17)。



Special Feature
Japanese
Architects on
the Asian
Scene

»» 04



特集／アジアで設計するということ 4

インタビュー

佐藤研吾

聞き手・まとめ／伊藤公文 写真／佐藤研吾、山内秀鬼(ポートレート)



外観

北側の建物外観。張り出した部分は2階の茶室。屋根の梁型は、スラブと一体で打設されている。



茶室

2階の茶室。庭に張り出した角に位置し、2面を鉄製枠の大きな窓にしている。写真のコンクリートの丸柱の前に茶釜。周囲は可動の畳敷き。



ホール

1階のホール。左手のコンクリート柱が建物の中心にあり、田の字平面を形づくる。右奥の木製扉が玄関。扉や窓には防犯のために鉄格子が入る。



階段の手すり

階段の手すり。先に、施主のニランジャンさんが鉄製部分をつくり、佐藤さんが現場に入ってから、木製部分を設計・施工した。



ラウンジ

1階のラウンジ。手前に木製の座椅子。奥の台は囲炉裏。上に鉄製自在鉤。窓から入る光に合わせ、家具は低く抑えるように設計されている。



書斎

2階の書斎。施主はここで詩を創作する。手前は吹抜け。奥の書棚は、中央下部に開口が設けられ、背後の茶室へとつながっている。



庭

施主がつくりあげた庭。柿や夏みかんの木などが繁茂する隙間から建物の屋根がのぞく。屋根の上には煙突状に貯水槽が置かれている。

高山建築学校が今につながっている

——佐藤さんは1989年生まれ、学部は東京大学の建築史の伊藤毅研究室、そこから大学院修士課程は早稲田大学の石山修武研究室に進んだのですね。

佐藤研吾 建築史に関心がありながら、本分は設計にあると思って、設計課題で指導をしていただいたことがある石山さんの研究室に入り、修士課程を終えた後、石山さんの事務所に入って、ふたつの幼稚園の設計にもかかわらず貴重な実務を経験することができました。

——並行して、飛騨高山の建築学校に参加していた。

佐藤 ええ、2009年、11年、12年に参加しました。ものづくりをとおして多くの人たちと強いつながりを持ち、その関係は

「日本風の家を考えてほしい」

——その一方で、インドとの関係が築かれていったのはどういう経緯からですか。

佐藤 石山さんに導かれてです。13年、アーメダバードにあるセプト大学の卒業設計の講評に石山さんが招かれましたが、その際に同行したのが始まりです。

そのとき、ほかの教育機関を見てみようと、アーメダバードから南に200kmくらいのパローダ・デザインアカデミーという建築の単科大学を訪れたことがきっかけで、

今も続いています。建築、生態学、服飾、工芸、デザイン、演劇、食品など幅広いジャンルに専門性をもつ人たちで、後に親しく協働することになる大工の青島雄大さんともそこで知り合いました。

——それが藍社というグループに発展するわけですね。

佐藤 はい。生態学を勉強する林剛平さんが震災後の調査で福島県大玉村を訪れたことがきっかけで、農業従事者の高齢化がせまる村の暮らしについて考え、身近なことから実践していこうという趣旨で立ち上がったグループで、高山建築学校の参加者が多くかかっています。藍の栽培や藍染めを中心にものづくりの活動の輪を広げようとしています。

14年、日本の学生も募ってワークショップを開催し、翌年、翌々年も行いました。

——アーメダバードもパローダもインド西部ですが、住宅を設計したシャンティニケタンははるか東ですね。

佐藤 パローダに何度も足を運ぶにつれ、インドと日本の関係をもう少し深く知りたいたいという思いから、日本の岡倉天心とも関係が深かった詩人・思想家のラビンドラナート・タゴールに関心を持ち、彼がインド

東部の西ベンガル地方の森につくった「森の学校」の地、シャンティニケタンを訪ねました。

「森の学校」が、現在のヴィシユヴァ・パローティ国立大学の前身です。この大学が日本との関係を今も強く保っていることを知り、日本とパローダの学生を含めた三者でワークショップの開催を提案し、賛意を得て、17年3月に「インフィールドスタジオ」と題して実施しました。

そのとき、同じ町シャンティニケタンの住人で、詩人のニランジャンがフェイスブックを通じて私に連絡をとってきました。彼は日本に留学経験があり、書や茶を嗜む日本通で、「現地インドの建築家が自宅を設計中だが、立面を日本風にしたい」ので提案してほしいということでした。

——それはまた面妖なりクエストですね。

佐藤 とまどいました。原型には手を付けず、扉（かど）戸を思わせるような窓の絵を送りました。

インドと日本での設計を並行

——それが実現したわけですね。

佐藤 そうです。形状は4間四方の平面、2階建て、外周はレンガ積み、真ん中にコンクリートの扁平な柱、勾配屋根というシンプルで、このじゃっかん閉鎖的な箱を外殻とし、内部に木材の造作が吹抜けを介して自由に展開するという構想です。

——木材による造作は佐藤さんが望んだのですか。

佐藤 同じ時期、東京の北千住でコンクリ



福島県大玉村での活動

藍染めなどの共同作業から始まる暮らしを提案。写真は藍がテーマのお祭り。

しかし、何の反応もなかった(笑)。それで終わりのはずでしたが、折角なので新たな案をつくって、日本からインターネットで送ってみました。

床面積は変えず構成を根本から変えた案ですが、その時点で僕のなかにこのプロジェクトに取り組み強いモチベーションが生まれました。幸い受け入れられて、やりとりが始まったのです。

1トの建物の内部を改修する仕事をしていました(BUOYアートセンター)。青島さんが調達してきた木材の傍らでテーブル、カウンター、扉などのスケッチと図面を描き、青島さんがつくるとい共同作業に手ごたえを感じていました。その延長をシャンティニケタンでも行ってみようと。

並行して、東京国立近代美術館の「日本の家・1945年以降の建築と暮らし」展に連動する企画として機関誌への寄稿を依



RC造の柱梁とレンガ壁は同時に施工される。レンガ壁に穴をあけておき、竹を差し込むことで、内部の足場としている。



躯体工事の完了後、インドに2カ月間滞在し、現場で内部造作の設計を行った。写真は現場の庭で設計を行う、佐藤さん。



歓藍社のメンバーたちも渡航し、得意の分野で共同した。写真は木工作业を行う河原伸彦さんと、布を染める渡辺未来さん。



書齋の内部造作の組み立て作業。庭で加工した木材を、手作業で合わせていく。写真は佐藤さんと大工の青島さん。

インドで設計を続けるために

—— 施工は順調でしたか。
佐藤 施工精度はあまりよくなって、こち

らの図面とは納まりが違う部分も多くありました。それも含めておもしろいと思

ました。むしろそうした施工の粗さは所与のものとして受けとめて、内部の造作の精度をすり合わせていったという側面もありました。

—— 将来、インドで設計の仕事をする可能性はありますか。
佐藤 そうしたいとは思っていて、萌芽がないわけではないのですが、現実には道は近いとはいえません。本格的に仕事をするとなれば、現地の設計者との協働が前提としても、僕自身がインドに今よりも長く滞在するかオフィスを構えるくらいの方が要請されるだろうから、現時点でそこまでは踏み出せません。それに先立って、今は「日本風の家」のデザインをする人と位置付けられているので、そのイメージから抜け出す必要も強く感じています。

—— それで施工の望む「日本風」に応えるものだったのですか。
佐藤 いわゆる「日本風」をなぞろうとしても、まがいものにはかならない。施主と僕とのあいだで何度もやりとりをし、内部は僕と青島さんが考え、一部の家具をつかって送り出したうえで、インドに渡って2カ月滞在し、現地の職人たちと共同で施工

したわけですが、その往還、交流の過程に「日本」が表出されるのではないかと考えたのです。プロジェクトのタイトルを「インド・シヤンティニケタンに同志を募って家を作りに行く」としたのはそれ故です。—— 設計は現地の建築家と共同で行ったことになるのですか。
佐藤 そうです。50分の1の図面を起こすまではしましたが、構造計算とかA4用紙4枚程度の簡単な確認申請書提出などの法律上の実務は現地の建築家に委ねています。もともと基本構想のアイデア提供という程度の役割からのスタートで、ビジネスとして設計業務を成り立たせようとは思っていませんでした。現実に設計料は私と青島さんの渡航費のみでした。

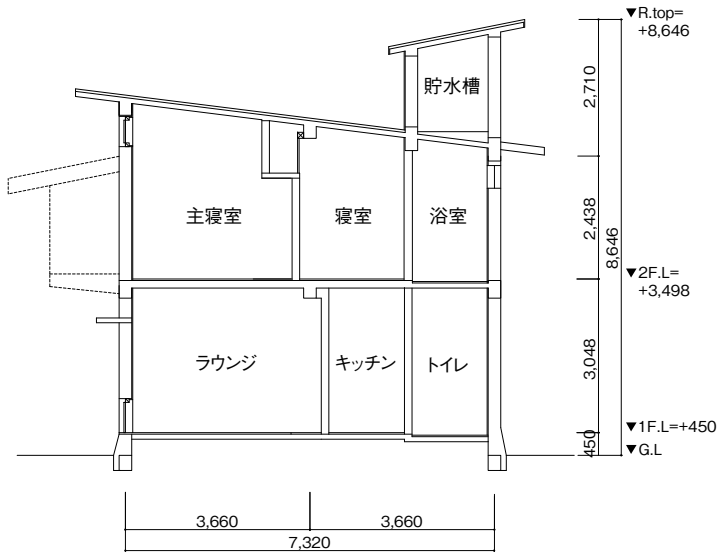
—— 完成した結果はどうでしたか。
佐藤 基本は床座という当初の合意もあって、開口部の位置を低くしています。そのためインドのほかの家比べて室内が暗いといわれますが、室内の隅々にほんやりとした暗がりがあることは、施主も私も意図したところで、この住宅の最大の特徴です。また、茶室入口の衝立状の造作や階段の鉄の手すりなどは施主自身が指図してつくったものであるように、この住宅はインドと日本の、施主、設計者、職人の共同作業の結果であって、その役割の境目は不分明です。それはいい加減というより、ほどよ

い混成だと思っています。
—— 将来、インドで設計の仕事をする可能性はありますか。
佐藤 そうしたいとは思っていて、萌芽がないわけではないのですが、現実には道は近いとはいえません。本格的に仕事をするとなれば、現地の設計者との協働が前提としても、僕自身がインドに今よりも長く滞在するかオフィスを構えるくらいの方が要請されるだろうから、現時点でそこまでは踏み出せません。それに先立って、今は「日本風の家」のデザインをする人と位置付けられているので、そのイメージから抜け出す必要も強く感じています。

断面図

0 1 2m

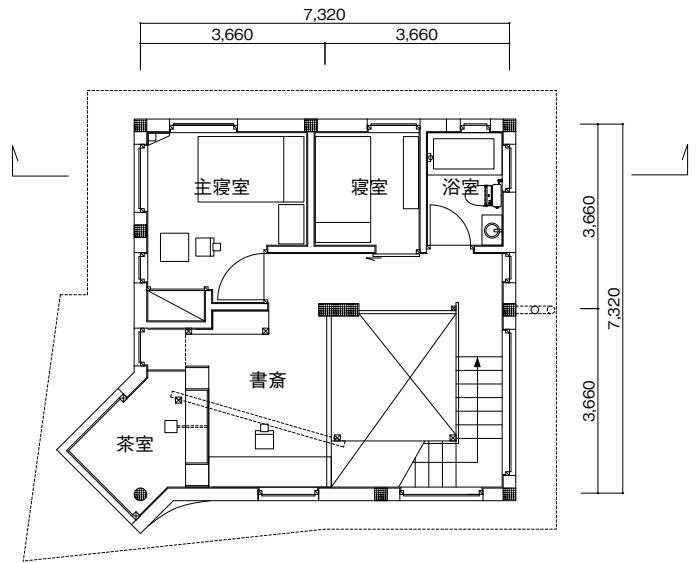
1/150



平面図

0 1 2m

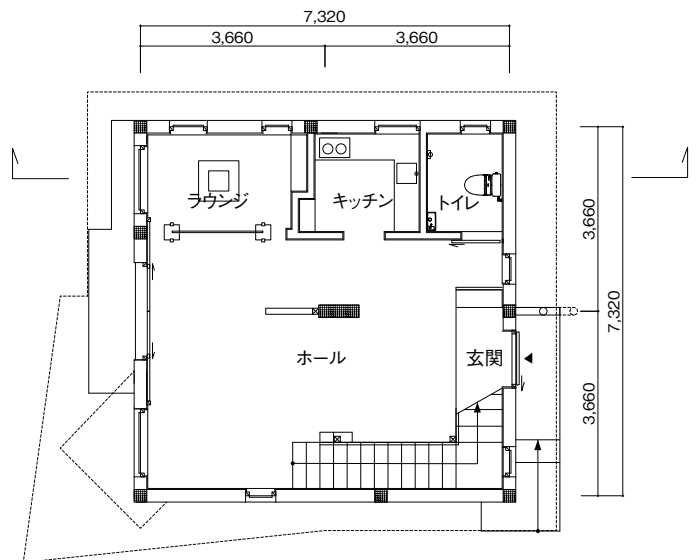
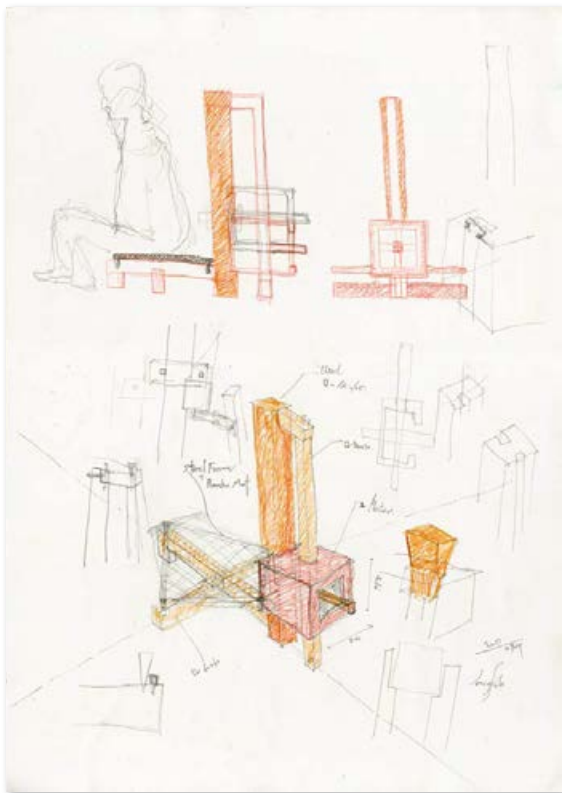
1/150



2F

家具のスケッチ

スケッチ 佐藤研吾



1F

1階ホールに置かれて
いる座椅子のスケッチ。
制作したテーブルに合
わせて、何枚も描き緻
密に設計している。

まとめ

「手」と「開放系」の組み合わせ

文／伊藤公文

佐

藤研吾さんは「手」の人である。

ひとつの座椅子をつくるために
おびたらしいスケッチを描く。即興的に見えながら、じつは正確に寸法が与えられ、丁寧に描写されている。運び入れられた木材が穿たれるさまを横にアイデアを練り、木材に触れながらつくり出すべき姿のイメージを図面に落とす。描くこととつくることが不即不離の関係にある。
佐藤さんは「開放系」の人である。

出自は建築系だが、高山建築学校から藍社に至るネットワークはジャンルの境界が取り払われた開放系のつながりである。インドの東西をまたぐ活動は、知人、友人の末広がりのネットワークの産物といえる。やわらかな開放系ネットワークだ。

この「手」と「開放系」の組み合わせが有効に働いているのは、佐藤さんのものごとに向かう姿勢による。既成の知を座して学ぶ以上に未知の現場に立ち会ってリアル

紅

な知を吸収しようとする意欲が勝り、さらに、その現場に身を投じて楽しむことを優先させる姿勢である。藍染めも、工作も、スケッチも、インドでのワークショップも設計も、無垢な身体性の発現と受容という点では差異がないのだろう。

顔・瘦身の青年の前に、今のところは可能性の沃野が広がっている。現在は再び東大の歴史研究室に在籍しているが、当面は研究に費やす時間を

優先するのか、国内で行ってきた諸々の活動の遠心力をさらに高めていくのか、インドの地で建築を設計するという願望の実現に突き進むのか。いずれにしてもこれから先、インドとの関係が途切れることはないとして、研究、教育、計画、設計、施工ほかさまざまな局面で、彼の身体をとおして日本とインドがどのような融合・離反を生じ、どのような成果が現れてくるのか、たいへん興味深い。



入口側の外観。周囲にはブロック塀とフェンス。防犯のため、玄関扉にも鉄格子。

「シヤンティニケタンの家」

House in Santiniketan

建築概要	
所在地	India, West Bengal, Santiniketan
主要用途	住宅
家族構成	夫婦+犬
設計	佐藤研吾／In-Field Studio
設計・構造設計協力	Milon Dutta
施主	Nilanjan Bandyopadhyay
構造	鉄筋コンクリート造(柱、梁、床)、レンガ組積造(壁)
施工協力	青島雄大、はしもとさゆり、渡辺未来、河原伸彦、瀬辺茂、マイアミ、向井麻理、向井翔馬
階数	地上2階
敷地面積	260.12㎡
建築面積	51.84㎡
延床面積	96.92㎡
設計期間	2016年10月～2017年11月
工事期間	2017年4月～2018年2月
おもな外部仕上げ	
屋根	鉄筋コンクリート打放し
外壁	モルタル荒仕上げ
開口部	木製建具、鉄格子
外構	モルタル荒仕上げ
おもな内部仕上げ	
床	モルタル、石板
壁	モルタル、漆喰、木製造作
天井	鉄筋コンクリート打放し

撮影／山内秀鬼



計画段階の内部造作の模型。日本で模型をつくり、建主にその写真や図面をネットで送り、木材調達を依頼していた。

バカンス向きの長期滞在アパートメント

クロアチアは2018 FIFAワールドカップロシアで、フランスと優勝まで争った国として記憶に新しい。あんなに強いとは思わなかった。

バルカン半島では昔からいろいろと大きな紛争があり、クロアチアは1991年ユーゴスラビアから独立した。海も山も美しく、紛争があったとは信じたいが、街によっては建物の外壁にいまだに弾痕が生々しく残る。

南部の世界遺産、ドゥブロヴニクがポピュラーだが、アドリア海の北には貴族の避暑地といわれたイストゥラ半島がある。対岸はイタリアのヴェネツィア。その海辺にロヴィニという小さな街があり、なかなかの景観をつくり出している。山上に「聖エウフミア教会（*）」の高い鐘楼をいただき、岬なのに海に浮かぶ島のような美しい街。

ツルツルになった路地の大きな舗石をたどって山上まで登っていくと、強大だった国力を感じる。

そのロヴィニからタクシーボートで海上を10分ほど進むと、この長いビーチリゾートがある。景勝の地を巡りながら歩いていてもいい運動になるが……。

広大な元オリブ園をオーストリアの富豪が所有していたそうだが、それをリゾート開発したものの。出来上がってから時間が経過しているせいか最新施設にはない落ち着きが漂っている。バカンス・シーズンには、たくさんのお客の中流層が家族連れでつめかけるといふ。

そこにハイシーズン前に6日間滞在した。人は少なくのんびり。レセ



ロヴィニの景観になる。

プシヨン、レストラン、カフェ、マーケット、プール、テニスコートなどが整っていて、宿泊は独立コテージや2階建てなど、さまざまな棟がたくさんある。85室のゲストルーム、252室のサービス・アパートメントと規模が大きい。宿泊したのは赤瓦の平屋が数軒連続するサービス・アパートメントのひとつ。といってもそれぞれに中庭があって独立性は高い。

部屋の平面はエントランスから中庭に至る軸線の左右に各機能がうまくレイアウトされている。ベッドエリアの天井は低い。石灰岩を積んだ大きな壁が一面だけあり、そのほかは天井も床も白いからシンプルで飽きがこない。キッチンには食材以外はなんでも揃っている。バスルームはバスタブ、ベイスン、便器の3点のほかに掃除用具置き場も兼ねていて整えられている。

毎朝、古く太いオリブの樹の下を明るい鳥の鳴き声を聞きながら、石灰岩の小石を敷き詰めたような白いビーチまで歩く。海は透明。プライベート・ビーチは独占状態に近い。ビーチに水着のマークが付いた一画があり、何か羽織らなくてはならないのかと思ったら水着着用禁止のナチュリスト（ヌーデリスト）・エリアでありました！

あわてて帰ってきて、バスルームでシャワーを使った後に冷えた白ワイン。危なかった。

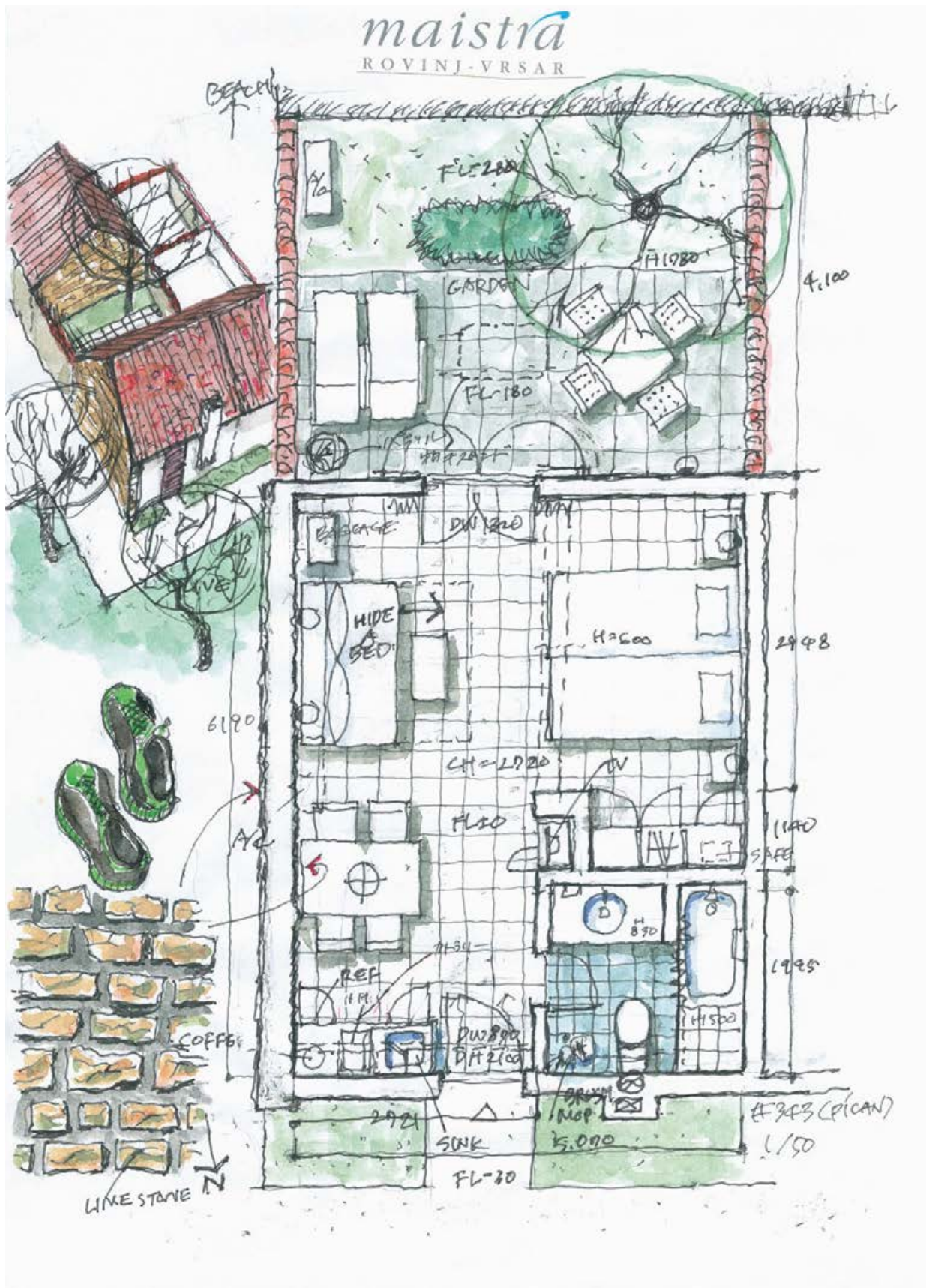
*聖エウフミア教会…聖エウフミアはロヴィニの守護聖人。建物はバロック・ヴェネツィア様式で鐘楼の高さは60mもある。



ルビンのビーチ。

うら・かずや/建築家・インテリアデザイナ。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に『旅はゲストルーム（東京書籍・光文社）』『測って描く旅』（彰国社）『旅はゲストルームII』（光文社）がある。

Text & Sketch by Ura Kazuya



使いやすい
平面計画。
中庭にも大きな樹。

RESORT VILLAS RUBIN

Add/Villas Rubin 1, 52210 Rovinj, Croatia
Phone/385 52 800 250
URL/https://www.maistra.com/rubin-rovinj



Tree-ness House 設計／平田晃久

Hirata Akihisa × Fujimori Terunobu

「からまりしろ」をつくりました

1
上層部の光景。
これだけ建築と
一体化した
緑化は珍しい。

現代
住宅
併走

第四十二回

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

連載

写真／普後 均

(平田晃久のポートレイトを除く)

平

田晃久の設計で最初に注目したのは、断面がS字形をした2階建ての鉄筋コンクリート造住宅（実現せず）だった。藤本壮介の青森県立美術館コンペ案の衝撃的平面図と同じ考え方がそこにはあったし、「平田が考えたことを藤本が先にやる」とも聞いていたからだ。藤本に聞くと「平田は考えすぎてちっともやらないから……」。

S字形は、箱として閉じるわ

けでも柱を立てて全面オープンにするわけでもなく、確かに壁が存在しながら、しかし開いているとも閉じているともとれる不思議な内外の関係を生み出す。S字形の発見者としてまず意識し、次に「からまりしろ」という言葉に新鮮さを覚えた。ふつう建築家はこういう日常的語彙で自分の考えを述べず、もっと抽象化したがる。建築の外寄りに外部の空間や建築と関係する部分（しろ）を残しておく

現代住宅 併走

Hirata Akihisa × Fujimori Terunobu

というのである。S字形とからまりしろは、じつは一体にちがいがなく、S字のふたつの端は外部との関係を求めて、あるいは外部をからめようと伸びた触手といってもいい。ヘチマの髭やイソギンチャクの触手に同じ。平田の鉄筋コンクリート造の〈Tree-ness House〉を訪れた。近所にある鉄骨造の「Overrap House」（2018）も一緒に見ての第一印象を述べるなら「ガ

チャガチャしている」だった。これは住宅に留まらず平田の近年の代表作「太田市美術館・図書館」（17）もそう。外観が、建築的造形の基本ともいえるべき対称形はむろん、四角をとらず、出たり入ったり、突き出したり凹んだり、複雑に凸凹する。こうしたガチャガチャ性の身近な萌芽は、今こう書きながら思い出すと、坂本一成の住宅で、塚本由晴が続き、平田に至っている。



2

わずかな段数の足がかりを利用して屋上へ上がれるようになっている。



3

給水がちゃんとしているから緑も元気。



4

↑細部の
納まりもよく
考えられている。



→打放しと
「ひだ」と呼ばれる
ボックス」の
コンビがいい。

5

建築史家としてガチャガチャ性に着目するのは、20世紀に入ってから初めて出現する質だからだ。ガチャガチャ性は20世紀という科学技術の世紀の本質と深く絡んで対立的に出現したにちがいない。とりわけ日本は先進地にほかならず、その根は震災復興期の今和次郎の思想と感性に由来する。

日本の現代建築に世界の目が集まる第一は妹島和世や西沢立衛の白く薄い建築にちがいないが、それに続くのは藤本や平田のガチャガチャ建築だろう。

実物を訪れてみよう。山手線の大塚駅で降り、しばらく進むと坂になり、中小のマンションと木造モルタル塗りの2階建て住宅と店舗が並び、線も参戦して……。

そんな現代の都市周辺部の混乱した光景のなかに目指す建物には立っているが、そのたまたまいは初の目撃となる。周囲の様子に構わずハキダメに鶴状態を選ぶわけではなく、スックと背筋を伸ばしながら上階に行くにしたがって強まるガチャガチャ

により周囲の混乱と上手に調停状態を保つばかりか、ハキダメに明るい未来をさえ映し出している。

もし上階のガチャガチャ部が打放しだけだったら未来は悲惨だが、植え込まれた緑がそれをあらかじめ救っている。救済者としての緑。

私はこれまで建築緑化に努め、古今東西の実例を訪れてきたが、こういう建築と緑のあり方、こういう都市と建築と緑のあり方に会ったことがない。微分された建築が微分された草木を纏うことによりからまりしるを形成して、周囲の都市空間をからめとり、建築単体を超えてイメージをあたりに向けて膨らますことに成功している。

向

かいのビルの踊り場から眺めながら、緑の力、効用について考えた。

緑という存在はあらゆる建築に対して中立的である。人類や建築が生まれるはるか前から地上に繁茂してきたから当然のこと。中立的ということは、対立的なデザインや材料、たとえば自然素材対工業製品のあいだに立つて両者の対立を調停する力をもつ。からまりしるが外のものからめとるためにはノリシロ(糊代)のノリにあたる接着剤が必要になるが、それが緑なのではないか。

しばし外から眺めてあれこれ



8
主寝室。
ダイニング。



6
建主の住居の
水まわり。
リビング。



9



7

現代住宅 併走 Hirata Akihisa x Fujimori Terunobu



10
階段を上がると
エントランス。



11
エントランスホールから
見下ろす。

東
孝光の「塔の家」(1966)に初めて入ったときの感動を思い出した。日本に固有の都市の狭小敷地が若い建築家の脳を絞り、こうした手品のようによくできた小住宅を滴り出す。そしてそこに海外の若い建築家は敏感に反応する。
最後に、ドアから外の緑化部

思ってから、平田に案内されて建物の中へ入った。
細いビルの中の開放しに囲まれた動線(通路、階段、踊り場)をたどり、右に曲がり左に折れ、身体の向きをそのたびごとに変えながら、ところどころに開口する上手な造りの窓やドアに目をやりながら、ビルオーナーの居住階に至る。すべてが狭いけれど平面はよく考えられているし、各部のデザインも充実している。

分に出て、段差をたどりながら下の階に至り、また中に戻った。微分された緑化部分は思いのほかよく考えられており、土壌も難題となる給水もこれなら大丈夫。とりわけ納得したのは緑化部分の造りで、「ひだ(と呼ばれるボックス)」を躯体に取り付けている。工場でプレファブリケートされた鉄板捨て型枠に現場打ち無収縮モルタルを施すことでこれだけ薄くできた。緑化の視覚的ポイントには細部の造りにあり、たとえば緑のまわりに現れる縁の厚みの調整にある。伊東豊雄の初緑化の「ぐりんぐりん」(2005)はこれがうまくいっていなかった。厚いと緑が死ぬし、薄すぎると建築が死ぬ。「現代住宅併走」をうたいながら、現代の最前線からは遠い作品ばかり続いたが、今回はタイトルどおり。



Tree-ness House

建築概要

所在地	東京都豊島区
主要用途	共同住宅+ギャラリー
設計	平田晃久 / 平田晃久建築設計事務所
施工	大原工務所
敷地面積	139.55㎡
建築面積	99.68㎡
延床面積	331.38㎡
階数	地上5階
構造	鉄筋コンクリート造
竣工	2017年

平田晃久

ひらた・あきひさ / 1971年、大阪に生まれ、京都大学建築学科を94年に卒業。伊東豊雄の事務所に入り、2005年に独立し、学生時代から旧知の藤本壮介とふたりで事務所のごとき状態を始めるも、当然のように仕事はなく、コンペと論議の日々。アンビルドの計画案とコンペ案とその理論で次第に注目されるようになる。06年に、デビュー作「榎屋本店」が実現し、17年には「太田市美術館・図書館」が竣工。18年より母校の教授を務める。



©Luca Gabino

Hirata Akihisa

藤森照信

建築家。建築史家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。工学院大学特任教授。おもな受賞=『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラ・ハウス)」(1997)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞。

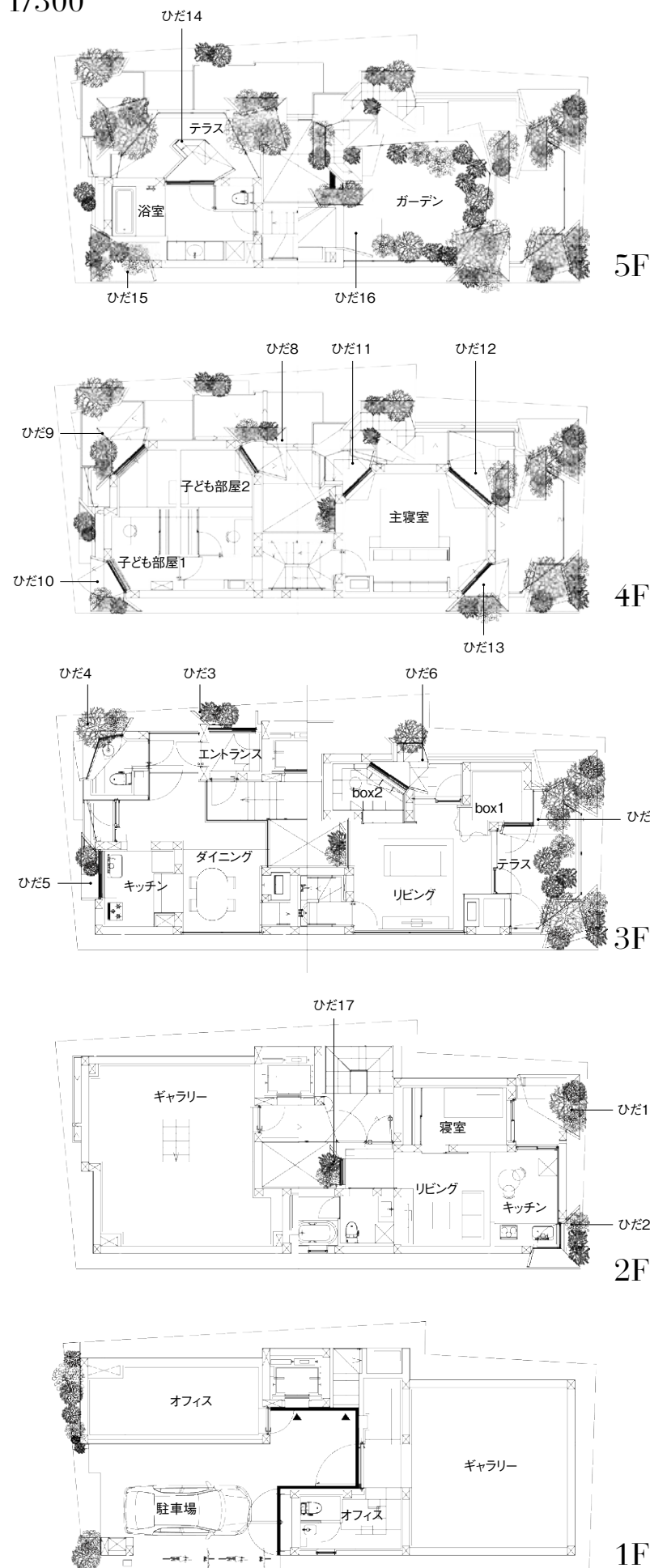


Fujimori Terumitsu

平面図

0 2 4m

1/300



日本のトイレの品質が台湾でもみとめられた

2018年6月、三菱地所設計が設計を手がけた「臺北南山廣場」が台北市信義区にオープンした。同プロジェクトはオフィスタワー、商業施設、文化施設の3棟からなる大規模複合開発で、事業主は台湾の大手保険会社、南山人壽保險股份有限公司(以下、南山人壽)。信義区は台北のなかでも政治・経済・商業の中枢で、敷地は街の中心軸の南端に位置し、台湾一の高さを誇る超高層タワー「台北101」に隣接するという都心の超一等地だ。

選ばれた理由について、同社の藤貴彰さんはこう語る。「クライアントは以前から日本のオフィスビルのノウハウを知りたいと考えており、トップ自らの丸の内の視察にいらっしやいました。ビル単体のデザインだけでなく、メンテナンスのあり方、街の雰囲気やにぎわいのつくり方も含めて、街全体をつくれる設計事務所であることを気に入っていただけたようです。今回の事業も長大な敷地によって分断されていた人の流れやにぎわいを創出するという意味では、街づくりですから」

アジア一のハイグレードのオフィスを目指す

東西に長い敷地はかつて台北市の展示施設や駐車場が存在していた土地。市はそれを50年の定期借地として貸し出し、再開発によって地域を活性化する拠点にしたいと考え、事業者と設計者のペアで応募することが条件のコンペを実施した。南山人壽は三菱地所設計に声をかけ、国際的な有名建築家も参加したこのコンペにおいて、タッグを組んだ両社の案はみごと、1等を獲得したのだ。

南山人壽は、シンボリックな建築にはしたが、絶対的なシンボルである台北101と調和したものにしたいと要望。これを受け、台北101を頂上として、それに連なるゆるやかなスカイラインを形成するようなイメージを考え、半分ほどの高

左右2点、写真/鈴木久雄



天井高が3.2mある執務室。



オフィスのエレベータホール。壁はオニキスの光壁。



オフィス階の共用スペース。



外観。左手に低層の商業棟、右手にオフィスタワー。写真/鈴木久雄

臺北南山廣場(台北市信義区)

TAIPEI NANSHAN PLAZA

取材・文/大山直美 写真/李建備(ポートレイトを除く)

さ272mのオフィスタワーを中心に、台北101に隣接した西側に商業棟、オフィス街に面した東側に文化・入口棟を配した。

感謝の意を表した「合掌」をモチーフにしたオフィスタワーは地上48階建て。アジア一のハイグレードのオフィスビルのあるべき姿を多様な角度から模索したと藤さんは振り返る。

その結果、基準階高4・8m、天井高3・2mという空間にゆとりのある執務室とした。エレベータには、日本でも先端の技術を導入し、上下2層のカゴが同時に動く「ダブルデッキエレベータ」と、IDカードをかざすとどのエレベータが自分のオフィス階に最も速く着けるかを教えてくれる「先行予約システム」を組み合わせることで、大勢が一度に、かつ効率よく移動することが可能になった。

各階のエレベータホールと執務室をつなぐ共用スペースの内装設計も、現地の設計事務所ではなく三菱地所設計が担当しており、一流ホテル並みの上質な

空間を実現している。

同社の川岸昇さんいわく、「働く人がステータスを感じられるような空間を提案しました。たとえば、テナント側の壁面にはブラックステンレス(鏡面仕上げ)やガラスといった素材を用いることで高級感を出したり、廊下の天井もダウンライトはなく、コア壁側の上部のスリットから間接照明で照らすことによって、天井面をすっきり見せています」。

基準階の共用施設で画期的なのは、各階に「淋浴間」(シャワーブース)と「集乳室」を備えた点だ。

「淋浴間」は自転車通勤者や就業前後にランニングをする人向けに設置。また、「集乳室」はいわゆる授乳室ではなく、搾乳を行うための専用スペース。長い育休をとる女性が少なくない日本と異なり、台湾では産後2、3カ月で職場復帰する女性が大勢というお国事情もあり、南山人壽からの強い要望で設けられたという。「淋浴間」はトイレも隣接したゆとりの空間。また、

男子トイレ



男子トイレの全景。
乾式清掃対応の床や
汚垂石など、日本の
仕様を採用している。



個室ブース。奥の壁は鏡張り。



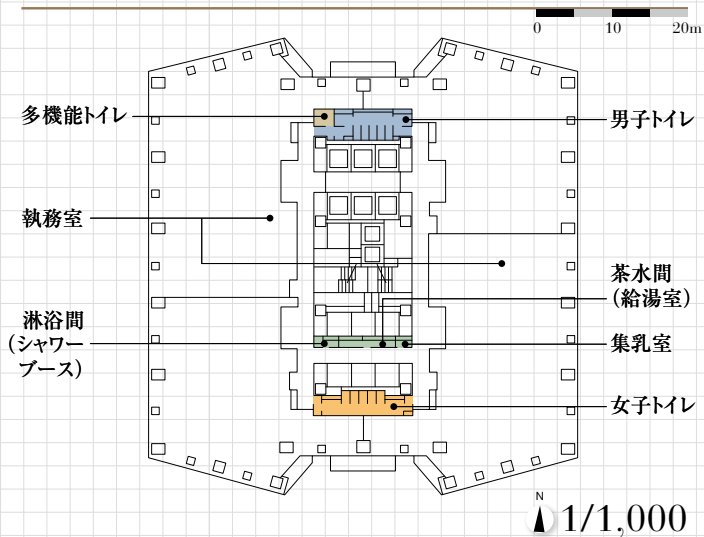
小便器。書類を置ける低いライ
ニング。

多機能トイレ

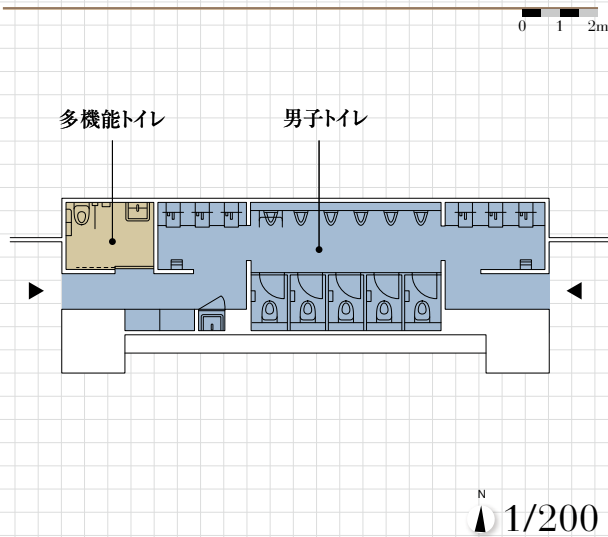


十分なスペースが確保された多機能トイレ。

12F フロア平面図



12F 男子トイレ・多機能トイレ平面図



女子トイレ



女子トイレの全景。
女性が働きやすいように、左手に小物入れを設置。

淋浴間(シャワーブース)



一人用のシャワーブース。



シャワー横のトイレ。



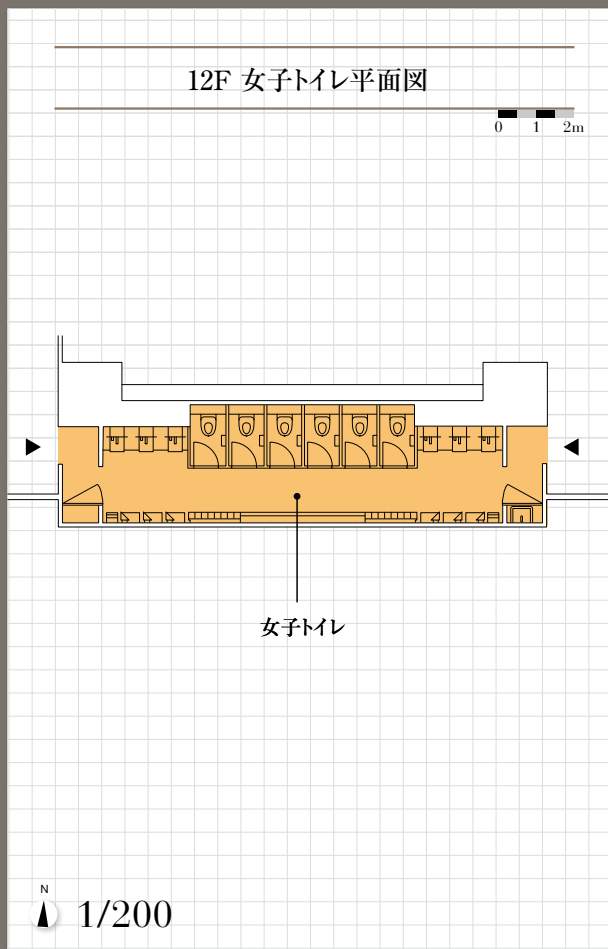
搾乳のための個室。

集乳室

茶水間(給湯室)



給湯室などの共用施設を清潔感のあるデザインにまとめている。





TAIPEI NANSHAN PLAZA

俯瞰。中央に臺北南山廣場のオフィスタワー。低層の商業棟と文化・入口棟が並び立っている。左手に台北101（写真提供／三菱地所設計）。

たい べい なん ざん ひろ ば
臺北南山廣場

建築概要

所在地	台北市信義区松仁路100号
事業主	南山人壽保險股份有限公司
主要用途	オフィス、商業施設、文化施設、地域貢献施設 (大型バス駐車場など)
設計	三菱地所設計、 瀚亞國際設計(台湾)
施工	互助營造
敷地面積	17,708㎡
建築面積	10,271㎡
延床面積	193,843㎡
階数	地下5階、地上48階、塔屋2階
高さ	272m
構造	鉄骨造(地上)、 鉄骨鉄筋コンクリート造+ 鉄筋コンクリート造(地下)
設計期間	2012年7月~2015年8月
施工期間	2013年11月~2018年1月

おもなTOTO使用機器

オフィスタワー 12階

●男子トイレ/女子トイレ
壁掛け便器 CW762Y
ウォシュレットSB TCF663 2T
洗面器 LW727
自動水栓 TWEL01N
●男子トイレ
低リップUS一体形小便器 UFS900 VG

※いずれも日本では未発売、または日本とは仕様が異なる商品です。

日本のトイレを
台湾で実現

「茶水間」(給湯室)もガラス張り
で開放感がある。

ところで、日本のオフィスビルのノウハウを取り入れたいという南山人壽の意向により、設計会社ばかりか、外装カーテンウォールやエレベータなど、随所に日本の企業の知恵や技術が多く生かされているのもこのビルの特徴のひとつ。むしろ、トイレも例外ではない。

「日本のオフィスのトイレでは常識的なことでも、台湾では実

例の少ないことがいろいろありました。そこで、三菱地所設計とTOTOの知識と経験をもとに、一つひとつ説明し、納得していただいたという経緯があります」と語るのは、三菱地所設計の大崎駿一さん。

たとえば、日本の商業施設や新しいオフィスビルのトイレでは、衛生上、入口にドアを設けないのが常識となっているが、台湾にはまだドアのあるトイレが多かった。プランの工夫により、ドアがなくても内部が丸見えにならず、むしろ衛生的でよいことを説明。また、台湾のトイレは、まだ床に水を流して掃除する湿式清掃が常識。湿式で



三菱地所設計
建築設計四部

大崎駿一

Osaki Shunichi



三菱地所設計
建築設計一部

川岸昇

Kawagishi Noboru



三菱地所設計
建築設計四部

藤貴彰

Fuji Takaaki

はなく乾式にすることで菌の繁殖が減り、段差もなくなり、ブースも床とのあいだの隙間がなくなることで独立性が高まるといったメリットを説明。さらに、オフィスビルにウォシュレットを全面設置したのも、台湾では初の試みだった。一つひとつ設計意図を伝え、いずれも施主の賛同を得られたという。

黒を基調にしたシックな男子トイレと、木の温かみを感じさせる女子トイレは、どちらも一見、日本の最先端のオフィスや商業施設のトイレを思わせ、目慣れたわれわれにはむしろ違和感がないが、初めて見る台湾の人々には驚きの連続なのかもしれない。

それとも、外国の設計者がトイレの一つひとつまで細かく設計し、現地の設計事務所と一緒に日本での設計監理と同程度の設計監修まで行った例は滅多にないとお三方は口を揃える。トイレの乾式清掃も含めた今後のメンテナンスについても、日本式の運営管理のノウハウを生かしていく体制が構築されているとのこと。

トイレ先進国日本からまるごと輸出されたような「臺北南山廣場」のオフィスのトイレは、今後、台湾の水まわり空間を向上させるうえで、ひとつの起爆剤になるにちがいない。

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、それぞれの土地柄、
会社の性格、そして会社をリードする
人物の性格、マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

地域に根づき、街を育てる家づくり

代表取締役

大澤 信孝 さん

小学生のときの作文で、「設計士になる」と書いていたという大澤信孝さん。幼い頃に夢見たとおり、進学した大学で建築学科に進み、大学卒業時には「木造建築に携わりたい」と、当時建売住宅事業を展開していた千葉県東葛市江戸川建設（エドケンハウスの前身）に入社。紆余曲折を経て、現在そのトップにいる。こう書くのと、みごとに夢をかなえたように思えるが、子どものときに大澤さんが思い描いた将来像とは微妙に違っているようだ。

人が家を買うプロセスを

たくさん見てきた

新卒で入社したとき、同期は24人いたが、そのほとんどが「セールスエンジニア」での採用。つまり営業だ。大澤さんはそのなかでも「飛び込みチーム」に

入れられ、アパートや借家まわりをすることになる。ただ「このときついた先輩がよかった」と本人が述べるように、トップセールスマンだった先輩の指導もあって、めげることなく営業を続け、大澤さんは4年ほどで新松戸店の店長を任されるまでになる。当時の仕事は建売住宅の販売だから、人が家を買おうと決心する様子から、引越して住みはじめるまでかわる。「そのプロセスがたくさん見られたのは幸せだった」と大澤さんが語るのには、家を買う人たちの様子をじっくり観察できたことにもつながっている、ということかもしれない。

その後、子会社に出向したり、1年ほど社外に出たりと、おだやかなサラリーマン人生ではなかったが、40歳を過ぎてエドケンハウスに復帰。バブルの荒波にもまれた会社は、当時「原点

である住宅」に回帰しているところであり、心機一転の大澤さんは仲間たちとともに新たな会社をつくるように、地道にエドケンハウスの基礎を固め直していく。

エドケンハウス

ならではの

「売り建て」住宅

現在、エドケンハウスが手がけるのは年間でおよそ60〜80棟。その7〜8割を「売り建て」住宅が占めるといえる。複数棟分の土地を入手・開発して、モデルハウス（最終的には分譲する）を1〜2棟建て、そこに人を集めて建築条件付きで土地を販売するのが「売り建て」住宅。重要なのは、いかに良好な環境の土地を入手するか。歴史と信用により地元不動産業者らと太いパイプがあり、さらに長く付き合いの続く地主たちから直接コ

ンタクトがあるのも強みとなっている。

とはいえ、1棟ずつ完全な自由設計で家を作るのは効率の点では決して有利ではない。コストや施工手順を優先させてまとめて建てる建売分譲のほうが、はるかに人手もかからず資金回収も早いだろう。しかし「気に入った土地を購入し、希望に沿った家を建てる」というところが、大手ハウスメーカーやパワビルダーに負けない、エドケンハウスならではの魅力。そしてそれを可能にしているのが、「本社から車で20分圏内」というエリアでの事業展開であり、長い時間をかけて信頼関係を築いてきた協力会社の存在だ。現場監督は会社にふたりという体制も、現場自体が近く、また職人たちが自分たちで考え、協力しながら工事を進める体制が出来る上がついているから可能になる。そしてニーズを見きわめた建



千葉県松戸市にある分譲地「スカイヒル五香II」。エドケンハウスが手がけた住宅が並び立つ。



edokenhouse

エドケンハウス



- 会社名
株エドケンハウス
- 本社所在地
千葉県松戸市上本郷2-3785
- 電話
047-366-3111
- 代表取締役
大澤信孝
- 会社創業
1968年
- 従業員数
25名
- 事業内容
建築条件付き土地分譲による
請負工事、注文住宅、
分譲住宅、リフォーム工事、
賃貸および仲介業
- 売上高
22億400万円(2018年3月期)
- URL
<http://www.edokenhouse.co.jp>
- TOTOの使用機器
・キッチン ミッテ
・浴室 サザナ
・トイレ CS340
・洗面所 オクターブ

取材・文／市川幹朗

写真／山下恒徳

物の仕様。建主の希望を丁寧に
すくい上げつつ、過剰な性能や
機能をウリにはしない。ところ
がそんなエドケンハウスが、4
年ほど前から住宅用制震ユニッ
ト「MIRAI E（ミライエ）」
の採用を標準化し、あえてさら
なる性能を追求
している。

「千葉は、全国
でも地震の危険
性が高いところ
ですから」
地元根差し、
購入者の希望を
見きわめ、提供
する住宅の質に
こだわる。大澤
さんの幼い頃の
設計への憧れは、
良好な家を提供
し、街を育てる
というかたちと
なって進んでい
る。



事業のエリア
を絞り、
地域に根づいた
活動をしていく。

Osawa Nobutaka

おおさわ・のぶたか／1954年東京都
生まれ。78年日本大学理工学部建築学
科卒業。78年江戸川建設入社。90年「三
井のリハウス」へ出向。95年エドケンハウス
入社。2010年より代表取締役。建
築条件付き土地分譲での請負受注が70
%ほどであり、おもに土地仕入れのため、
市内業者および地主、賃貸オーナー巡り
に重点を置いている。



1階のキッチン、リ
ビング、ダイニング。
豊富な開口部が室内
を明るく照らす。



1階の和室、リビ
ング。カウンター越し
に2部屋がつながり、
広く感じられる。



2階の屋根裏も、
「Family Attic」と
して利用可能にして
いる。

新商品開発物語



New Product Story

Interview with Murahashi Toshiyuki and Fukuda Yuko

システムバスルーム「sazana」
床ワイパー洗浄（きれい除菌水） オプション

2019年2月発売

えつ、スイッチひとつで
お風呂の床がきれいに!?!
なんてラクなんでしょう。

Before

お風呂の床（実験装置）に墨汁を垂らし、床ワイパーによる洗浄の検証を行った。

昨年システムバスルームの「SYNLA（シンラ）」に搭載し好評だった「床ワイパー洗浄（きれい除菌水）」が「sazana（サザナ）」にもオプションで搭載。汚れる前に、汚れの原因を退治するので、お風呂の床掃除がとてラクになります。ふたりの開発担当者が、ちよつと驚きの開発秘話を語ってくれました。

聞き手・まとも／村上浩平 写真／山下恒徳

「床ワイパー洗浄（きれい除菌水）」でお掃除がさらにラクに

——新しいサザナは、どういう商品ですか。福田祐子 サザナは多くのお客さまにご支持いただいていたきたTOTOバスルームのスタンダードモデル。カラーバリエーションが増え、節水と刺激感を両立する「コンパクトウェーブシャワー」が加わりました。さらにとことん磨いてきたお掃除のしやすさに、切り札ともいえる「きれい除菌水」を取り入れた「床ワイパー洗浄（きれい除菌水）」をオプションで追加したのが、今回の新商品です。
——お風呂の床をきれいにするんですね。

きれいな除菌水担当

TOTO株式会社機器水栓事業部
水栓開発第一部
アクアオート開発グループ

村橋利行

Murahashi Toshiyuki

むらはし・としゆき／1967年福岡県生まれ。92年山口大学大学院生産機械工学専攻修了。同年TOTO入社。94年発売のアルカリ7をきっかけに、改質水の技術開発に従事。2014年きれい除菌水プロジェクトに参画。「きれい長もち」の技術開発に携わる。15年に自動水栓、16年にキッチン、洗面所と展開。浴室に至る。

After



システムバスの
床ワイパー洗浄
(きれい除菌水)担当

TOTO株
浴室事業部 浴室開発部
浴室商品開発グループ

福田祐子

Fukuda Yuko

ふくだ・ゆうこ / 1981年神奈川県生まれ。2004年明治大学理工学部建築学科卒業。同年TOTOバスクリエイイト入社。浴室開発部でシステムバスルームの商品開発に従事。新商品では、抗菌・防カビ仕様の排水口、床ワイパー洗浄(きれい除菌水)の開発を担当。



お風呂の床(実験装置)

福田「お風呂のどこの汚れが気になるか」というお客さまアンケートの結果、床まわりに関する部分が上位にランクインしたのです。床や排水口のお掃除は姿勢がつかつたり、汚れに直接触れたりします。清掃頻度を減らしたいというニーズがとても高いんですね。そこで、従来のお風呂掃除の常識を変える「床ワイパー洗浄(きれい除菌水)」という新機能を導入しました。

——自動車のワイパーみたいですね。

村橋利行 ワイパーのように左右に動きながらお風呂の床の汚れを流す装置です。黒カビの原因となる角質を水流で追い込みながら排水口に流し、いわゆるピンク汚れの原因となる細菌も「きれい除菌水」を使って除去します。汚れてからきれいにする、というのではなく、汚れる前に原因を取り除いてしまおうと考えたんです。

福田 サザナの「お掃除ラクラクほっカラリ床」はもともと汚れを落としやすい床ですし(親水パワーの効果)、抗菌・防カビ仕様の「お掃除ラクラク排水口」も付いています。さらに汚れの原因を抑えることで、きれいがぐっと長もちするようになりました。お風呂から上がったらスイッチを押すだけ。お掃除の回数が驚くほど減りますし、その分つらい姿勢からも解放されます。

——お風呂掃除がスイッチひとつで。
福田 それがひと月約300円のランニングコスト(1日1回使用の場合)でできるんです。

汚れの原因を
追究することから始まった

——黒カビの原因は角質とおっしゃいました

商品情報



システム バスルーム 「sazana」

1616サイズ(Sタイプ)

1,071,500円
[床ワイパー洗浄
(きれいな除菌水)付き写真セットの
希望小売価格]

※床ワイパー洗浄(きれいな除菌水)はオプション(60,000円)です。
※新色の壁・床・カウンターの
詳細はカタログをご覧ください。

カタログのご請求

詳細は「システムバスルーム
サザナNo.470」をご覧ください。
カタログをご希望の方は、
本誌に同封の
「TOTO通信2019年新春号
アンケート用紙」にご記入のうえ、
ファクス、またはウェブにて
お申し込みください。

ファクス

▶▶093-571-0999

お問い合わせ

商品の技術的なご質問は、
技術相談室ナビダイヤルまで
お問い合わせください。

ナビダイヤル

▶▶0570-01-1010

たが、どのようにわかったのですか。

村橋 どんな汚れにも、その原因があるはずです。黒カビやピンクのヌメリは、何が原因で、それらの原因物質が、いつ、どこに、どのくらい蓄積されて、目に見えるようになっていくのだろうと。そこで皮脂、角質、石けんカス、水垢などをターゲットに研究を重ねました。その結果、みなさんがとくに気になる黒カビについては、人間の肌の表面からはがれ落ちる角質がカビ菌の大好物で、一番の栄養源であることが、今回初めてわかったんです。

——それは新発見ですか。
福田 私もカビの菌がいるから黒カビが生えるくらいにしか思っていなかったんです。村橋 黒カビの菌は種類がたくさんあって、いっぺんには退治しきれません。でも、繁殖の原因である角質をなくせば一網打尽になります。

——食料がなくなるんですものね。では、ピンク汚れのほうはどうですか。

村橋 こちらは以前からわかっていました。水道水に極微量含まれるメチロバクテリウムという細菌です。彼らが床に住みついて家族をつくり、コロニーを形成する

とピンク色になってくるんです。

床ワイパー洗浄という 画期的な機能

村橋 「床ワイパー洗浄(きれいな除菌水)」は、2段作動で床をきれいにします。かかる時間はトータルで約23分。まず床ワイパー洗浄でゆつくり3回(標準モード)、一方の端から反対の端まで水を放出。大量の角質をしつかり洗い流します。

——黒カビの原因を追い出すわけですね。
村橋 最後にもう1回、ノズルから「きれいな除菌水」を同様に放出して、床に住みつく前のメチロバクテリウムを除去します。
——ピンクのコロニーをつくる前に除菌する、と。

村橋 お風呂に入ると、ひとりにつき1回あたり約1000万枚もの角質が落ちるのですが、まずは角質をいかに効率よく、床から排水口へ追い込むか。それが課題でした。床に付着していない角質は、思いのほかふわふわしています。水をざっと流すと、水流に運ばれて壁にくっついてしまう。これでは逆効果です。ホースの先を指でつま

んで調整しながら、水の出し方と角質を追い込んでいく動きを何度も試行錯誤しました。その結果、板状の吐水で途切れのない水の膜をつくり、角質を追い越さないよう、ゆつくり排水口に追い込む方式にたどり着いたのです。

どんな条件でも 同様の効果を発揮する

——一番苦労されたのはどこですか。
村橋 ノズルの形状ですね。角質を除去するには、一定の洗浄圧が必要なのですが、お風呂の広さも水圧もお宅によって違います。一つひとつオーダーメイドというわけにはいかなないので、どんな条件でも同様の効果を出せる形状を目指しました。

福田 床の広さが商品によって違うんですが、水流が強すぎると角質が壁まで飛んでしまうし、弱いと隅まで届きません。水の膜に隙間があれば、その部分は洗い残されてしまいます。

村橋 数十ミクロン単位の修正も含めて、100本以上のノズルを試作しました。来る日も来る日も最適な解を見つける作業。

もちろん、効果を確認するためには、そのたびに残った角質を数える作業がもれなくセットで付いてきます(笑)。
福田 本当に、残った角質を顕微鏡を使って、すごい回数数えたんですよ。

あらゆるところに 「きれいな除菌水」を

——今後はどういうことを目指していますか。

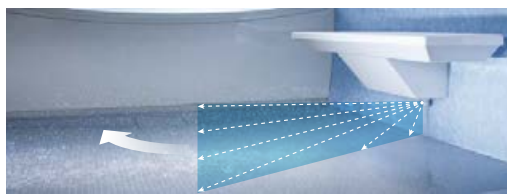
福田 「床ワイパー洗浄(きれいな除菌水)」は、シンラやサザナの決まったタイプでしか選べません。できれば装置の自由度をあげて、どんなお風呂にでも取り付けられるようにしたいですね。

村橋 「きれいな除菌水」は、どこにでもある水道水から機能水をつくり出して除菌します。そしてその後、つくったものはもとの水に戻ります。環境への負荷がゼロ。つまり環境の「きれい」も守るわけですね。日本の「きれい」に対する意識や技術は世界から注目されています。これをとことんきわめたい。もっともっと「きれいな除菌水」が活躍する場を増やしていきたいですね。

床ワイパー洗浄(きれい除菌水)の仕組み

板状の吐水

TOTO独自の板状の吐水で水の膜をつくり、角質を追い越さないように排水口へ追い込む。

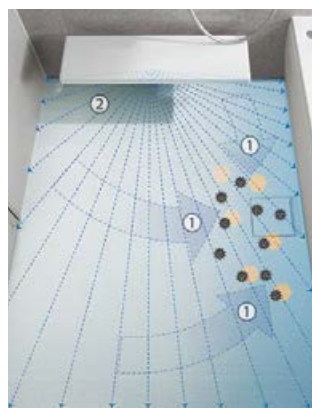


イメージ

洗浄と除菌の流れ

①床ワイパー洗浄

板状のワイパー水流(水道水)による洗浄圧とプログラムを用いることで、汚れが落としにくいエリアの汚れも確実に排水口へ洗い流す。



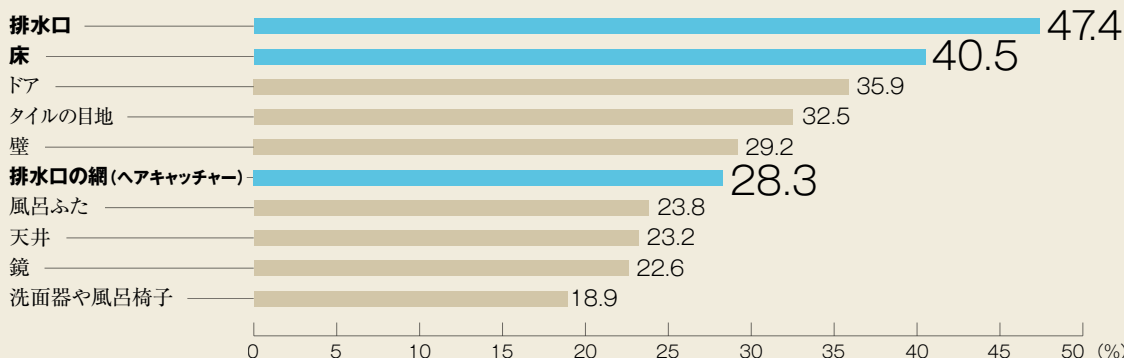
イメージ

②除菌仕上げ

床面くまなく「きれい除菌水」を吹き付け除菌仕上げ。菌やカビの増殖を抑える。

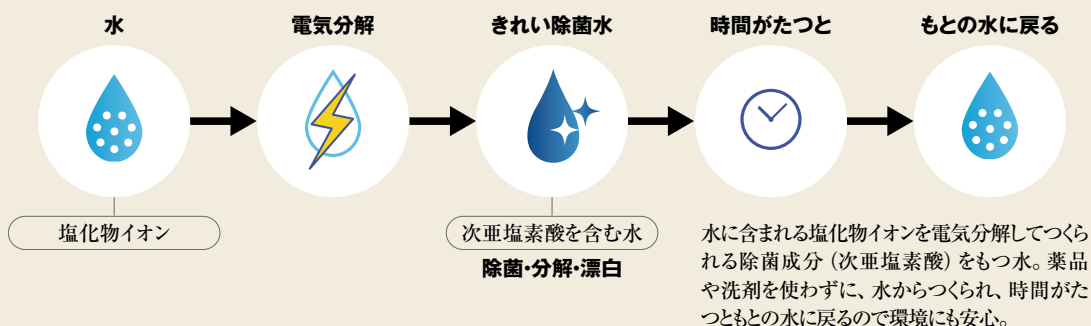
浴室の中で、汚れが気になるところ(上位10位を抜粋)

n=2,190



出典:「住宅設備と生活意識に関する実態調査」TOTO調べ(2016)
全国にお住まいの20~79歳男女(複数回答、性別・年代の10セルで層化抽出)

「きれい除菌水」の仕組み



床まわりのきれいが長持ちするそのほかの機能



お掃除
ラクラク ほっカラリ床



お掃除
ラクラク 排水口
(抗菌・防カビ仕様)

※詳細は弊社ホームページやカタログをご確認ください。

New Product Story

Interview with
Murahashi Toshiyuki
and
Fukuda Yuko



夢のジオグラフィー

RCRアーキテクトは、スペイン・カタルーニャ地方のオロットを拠点に、歴史や文化など、その土地に根差した詩情豊かな建築を生み出してきました。「RCRアーキテクト展 夢のジオグラフィー」では、奈良県吉野町の人々と協働しているパビリオンの一部や、ドキュメンタリー映像、美しいドローイングなどを通じて、彼らが長い時間をかけて故郷で実現しようとしている「ラ・ヴィラ」プロジェクトと、日本とのかかわりを紹介します。

今回は「夢のジオグラフィー」というタイトルに込められた意味について、スペイン在住でRCRとも親交のあるブックデザイナーの坂本知子さんにひもといていただきます。

「夢から建築、そして現実へ」リアリティ

2018年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展でカタルーニャ館の展示を担当したRCRアーキテクトは、「Dream and Nature——夢と自然」というタイトルのもと、巨大なレンズ状の無数の丸ガラスを浮かべたインスタレーションを発表した（その幻想的なイメージは多くのメディアで紹介されたので覚えていた方も多いだろう）。しかし現代建築の潮流を問う国際的な舞台でなぜ「夢」なのか。そして今回のTOTOギャラリー・間で「Geography of Dreams——夢のジオグラフィー」もまた「夢」と題されている。この言葉は彼らにとって、何を意味するのだろうか。

RCRは、とくに若い人たちに向かって「夢を見る」と臆せずに語る。夢を見るという行為はとても個人的で自由なものであり、それは理性の対極に位置するものとして時にあまいで、はかない印象をも与えるかもしれない。しかし彼らは、今私たちが住んでいるこの世界——人間が（飛行機によって）空を飛び、地球の反対側にいる友人と瞬時に想いを伝えあえるようなこの世界——は、過去に誰かが見た「夢」が

実現されてきたものであるというシンプルな認識をもっている。つまり、「夢」という言葉は「現実」の対義語ではなく、「未来の現実」の第一歩なのである。環境、経済、社会に関する諸問題や、敷地やクライアントから与えられる諸条件を建築のスタートとする、夢は多くの人々の協力をまとめるためのゴール、つまりビジョンとなりうるのではないか。

17年5月にプリツカー建築賞を手にした彼らは、3人の考えが今後広く多くの人々と共有されることを信じて、その後「ラ・ヴィラ」(*1)という大きな「夢」を紡ぎはじめている。この「ラ・ヴィラ」は展覧会の中心ともいえる彼ら自身のプロジェクトであり、その全貌がビエンナーレのそれよりも具体的なものとしてくわしく紹介される、おそらくほとんど初の機会となるだろう。彼らの故郷カタルーニャ地方ガロツチャの、ジオグラフィーとも呼べる大きなスケールをもった深い森と山からなる大自然のなかに、学習と協働のための施設やさまざまなマテリア（物体・物質感）によるパビリオン群、そして自然をほとんどそのまま空間として体感し、身体で理解するための場所が、これから先長い時間をかけてひとつひとつ現実のものとなっていくという彼らの言葉によれば、ここは建築のもつ力によって「知覚することを学ぶ」

場所であり、人間が空間を、建築を、社会を、そして世界を知覚する仕方そのものを革新していくための研究所のような場所となる。すべての人々に開かれた、完成を予定する必要のないプロジェクト。建築は目的ではなく、そこへ集まる人々が、いまだ存在しない夢の建築を「見る」きっかけとなる。若い頃に訪れて以来、深い興味をもちつづけてきた日本の文化は、彼らのこのような世界観に大きな影響を与えたという。そして2年前に奈良県の吉野の杉や檜を育て扱う人々と出会い、彼らと「紙のパビリオン」プロジェクトをとともに進めている(*2)。それらをつないだ旧知の親友でもある写真家・鈴木久雄氏(*3)の目によって撮影された数々の写真やビデオからも、言葉だけではとらえきれない彼らの思想を感じることができよう。

文／坂本知子／
ブックデザイナー
(本展の関連書籍)
「RCRアーキテクト
夢のジオグラフィー」を担当

*1 RCRアーキテクトが故郷カタルーニャ地方で広大な土地を入手し、押し進めているプロジェクト。研究施設や工房、宿泊施設、パビリオンなどを配し、開かれた研究の場の実現を目指している。

*2 「ラ・ヴィラ」で計画中のパビリオン。吉野杉を使い、吉野の職人により施工される。TOTOギャラリー・間において、構造物の一部が展示される。

*3 スペインの建築雑誌「エル・クロッキー」の専属カメラマンとしても活躍する国際的写真家。

Next Exhibition
at
TOTO
GALLERY・MA

↓ 次回
予告

中山英之展
「, and then」

独自の方法論と作風をもつ建築家、中山英之氏の展覧会を開催します。中山氏の建築の魅力がどこから生まれてくるのか、建築模型や図面だけでは伝えきれない、思考の道筋や、実現した建築の質、完成後の時間の流れを映像で表現します。ユニークな視点に裏打ちされた、中山氏の「思想」と「実験」を提示します。

会期
5月23日(木)～8月4日(日)
講演会
5月30日(木)／イイノホール



TOTOギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日、
夏期休暇、年末年始、
展示替え期間
入場料／無料
アクセス

- 東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
- 都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
- 東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分
- 東京メトロ銀座線・
半蔵門線・都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分

<https://jp.toto.com/gallerma>



会期／2019年1月24日(木)～3月24日(日)

RCRアーキテクト
RCR Arquitectes



Hisao Suzuki

1988年にラファエル・アラнда(61～、写真右)、カルマ・ビジェム(62～、同中央)、ラモン・ウイラルタ(60～、同左)の3人により、スペインのカタルーニャ地方オロットに設立された建築スタジオ。プリツカー建築賞(2017)をはじめ、カタルーニャ州政府による建築文化賞(05)、フランス芸術文化勲章オフィシエ(14)など、国内外で多数の受賞歴をもつ。08年に旧彫刻鋳造工場であった「バルベリ・スペース」へ拠点を移し、13年にRCR BUNKA財団(日本語の「文化」に由来)を設立して以来、建築とランドスケープ、アートや文化と社会とのかかわりの促進に寄与する活動を続けている。奈良県吉野町をはじめ、多くの人々の協力を得て、進行中のプロジェクト「ラ・ヴィラ」内に、17年RCR LAB・A建築研究所を設置。代表作に「トゥッソル・バジル陸上競技場」(1991～2012/スペイン・オロット)、「ラ・リラ・シアター・パブリック・スペース」(11/スペイン・リボイ)、「スーラー・ジュ美術館」(14/フランス・ロデーズ)、「ヴァールゼ・クローク・メディアテーク」(17/ベルギー・ゲント)など。



RCRアーキテクトと「ラ・ヴィラ」計画地

(スペイン、ラ・ヴァイ・デ・ビアーニャ)

写真/Hisao Suzuki



トゥッソル・バジル陸上競技場

(1991～2012/スペイン、オロット) 写真/Hisao Suzuki



ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2018
カタルーニャ館展示「Dream and Nature」

(2018/イタリア、ヴェネチア) 写真/Adria Goula

News File

TOTOの最新情報

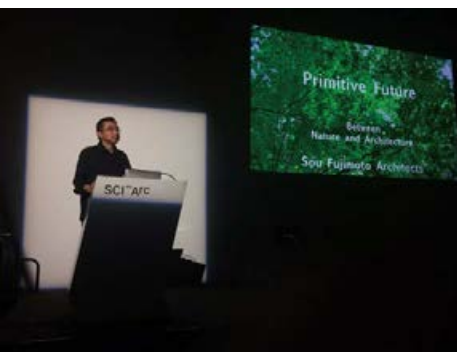
TOTO News **4** ↓

ジャパン・ハウス ロサンゼルスで TOTOギャラリー・間 巡回展を開催しました

外務省の对外情報発信拠点「ジャパン・ハウス」(サンパウロ、ロンドン、ロサンゼルス)で、TOTOギャラリー・間は、展覧会「藤本壮介展 未来の未来」を開催しました。2017年に17万人を動員したサンパウロ、18年にデザインミュージアムでの講演会が好評だったロンドンに続き、ジャパン・ハウス ロサンゼルス、およびTOTOロサンゼルス・ショールームで開催し、多くのお客さまにご来場いただきました。また、南カリフォルニア建築大学(SCI-Arc)での講演会も大好評のうちに終了しました。



ジャパン・ハウス ロサンゼルス展示場の様子。



南カリフォルニア建築大学(SCI-Arc)での講演会の様子。

TOTO News **3** ↓

2019年版 TOTOドローイング カレンダー

2019年版
TOTOドローイングカレンダー



今年はアーキテクテン・デ・ヴィルダール・ヴィンク・タュー(ADVVT)のドローイングカレンダーをお届けします。ヤン・デ・ヴィルダールを中心に3人の建築家が構成されるADVVTは、2018年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展において、新進気鋭の建築家へ贈られる銀獅子賞を受賞。世界的に注目を集めるベルギーの建築家ユニットです。2019年9月にTOTOギャラリー・間(東京・乃木坂)で開催する展覧会に先駆け、彼らの独自の世界をご紹介します。

TOTO News **2** ↓

ESG投資指標 「Dow Jones Sustainability World Index」の構成銘柄に 選定されました

TOTOは、世界の代表的なESG投資(*1)指標である「Dow Jones Sustainability Indices(以下、DJSI)」の「World Index (DJSI World)」の構成銘柄に選定されました。同銘柄への選定は7回目です。また、アジア・太平洋地域版の「DJSI Asia Pacific」の構成銘柄にも10年連続で選定されています。

DJSIは、米国S&Pダウ・ジョーンズ社(*2)とスイスの社会的責任投資の調査会社ロベコSAM社が提携し開発した株式指標で、「経済」「環境」「社会」の3つの側面から企業を分析し、持続可能性(サステナビリティ)にすぐれた各産業分野の上位10%の企業が「DJSI World」に選定されます。

TOTOグループは、世界中のお客さまに安心と信頼のTOTOブランドをお届けすることで、広く社会や地球環境に貢献する存在でありつづけることを目指します。

*1 ESG投資:環境(E)、社会(S)、ガバナンス(G)に配慮している企業を重視・選別して行う投資。

*2 S&Pダウ・ジョーンズ社:世界的にも主要となっているアメリカの経済新聞「The Wall Street Journal」などを発行する経済ニュース通信社。アメリカの代表的な株価指数「ダウ・ジョーンズ工業株価平均(通称:ダウ平均)」を算出していることでも有名。

MEMBER OF
**Dow Jones
Sustainability Indices**
In Collaboration with RobecoSAM



TOTO News **1** ↑

社史 『TOTO百年史』を オフィシャルサイトで 公開中

2017年5月に迎えたTOTOグループ創立100周年を記念して、2018年10月1日よりオフィシャルサイトで社史『TOTO百年史』を公開しています。多くのお客さまにご覧いただけるよう、電子ブック形式としました。TOTOグループの平坦ではなかった歴史を顧み、再認識することで、次の100年に向けての道標となるよう編纂しています。

社史『TOTO百年史』
<https://jp.toto.com/history/100yearshistory>

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

www.toto.co.jp/publishing

「TOTO通信」定期購読を
ご希望の建築家を
ご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信
データ管理室まで
*法人あての送付となります。

tel 093-513-6234

e-mail
toto_tsushin@jlink-net.com



アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

Bookshop TOTO

所在地 東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階

電話 03(3402)1525

定休日 月曜日・祝日・
「TOTOギャラリー・間」
休館中の土曜日・
日曜日・夏期休暇・
年末年始

TOTO出版

所在地 東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階

電話 03(3402)7138

ファクス 03(3402)7187

全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになります。書店遠隔の方はお問い合わせください。

セラトレーディング

所在地 東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル

電話 03(3796)6151、
03(3402)7134
(東京ショールーム)

ファクス 03(3402)7185

定休日 月曜日・祝日・
夏期休暇・年末年始

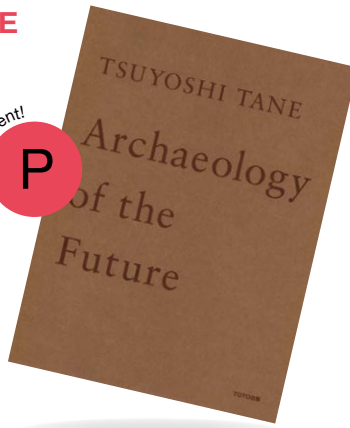
TOTO出版のお知らせ

Book

『TSUYOSHI TANE Archaeology of the Future 田根 剛建築作品集 未来の記憶』

同封の
「TOTO通信アンケート」に
お答えいただいた方
の中から、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。

2冊
合わせて、
ぜひご一読
ください。



フランス・パリを拠点に活躍する建築家・田根 剛(たねつよし)の、国内外通じて初の作品集を発行しました。場所の記憶を掘り起こし、建築をつくることで未来につなげることを目指す田根の思想と活動を、話題作「エストニア国立博物館」「新国立競技場案 古墳スタジアム」ほか進行中のプロジェクトなど17作品を通し

で紹介。膨大なリサーチ資料、写真、図面による3章立てのダイナミックな構成や、大判でシンプルな装丁など、こだわり満載の著者渾身の一冊です。

著者	田根 剛
定価	3,900円+税
体裁	228×304mm、ソフトカバー、 320ページ
発行日	2018年11月

2

Book

『田根 剛 アーキオロジーから アーキテクチャーへ』



サッカーから建築へ。夢と希望を携えて、日本を飛び出し、いつしか建築家に。記憶へのリサーチ、意味の探求、チームを率いること。今、世界から注目される若手建築家・田根 剛が、建築家を志したきっかけから、「エストニア国立博物館」など話題のプロジェクトの背

景、設計思想、そして未来への想いを、ジャーナリストの瀧口範子のインタビューで一気に語り下ろしました。

著者	田根 剛、瀧口範子
定価	1,000円+税
体裁	128×182mm、ソフトカバー、 96ページ
発行日	2018年10月

セラトレーディングのお知らせ

ミニマルデザイン ×ユーティリティ =L-CUBE



L-CUBE シリーズ
洗面キャビネット
DV8004-11
希望小売価格:
574,000円(税別)

セラトレーディングでは、ドイツ・Duravit(デュラビット)社の洗面キャビネット「L-CUBE(エル・キューブ)」シリーズを発売いたします。ドイツのデザイナー、クリスチャン・ヴェルナーによるもので、陶器の側面に化粧板を直接接着する独自の技術「C-BONDED」により、シームレスでミニマルな意匠性を実現しています。また、大容量収納とプッシュオープン・ソフトクローズ機能など機能性も兼ね備えています。インテリアのようにあえてオープンにして魅せる水まわりを検討してみたいかでしょうか。

当商品を掲載した「セラトレーディング総合カタログ2018」は、ウェブサイト、またはファクスにてご請求ください。
WEB: <https://www.cera.co.jp>
FAX: 03-3402-7185

心も身体ももっとラクに、
サザナが叶える
心地よい毎日。



sazana

システムバスルーム サザナHSシリーズ

くつろぎの サンジュウマル

全身で心地よさを感じる、サンジュウマルアイテム



お掃除
ラクラク (ほっかり)

コンフォート
ウエーブシャワー

魔法の
じん浴槽
(JIS規格熱浴槽準拠)

お掃除ラクラク クリーンでうれC

お掃除が簡単・ラクラク、クリーンアイテム



お掃除
ラクラク (ほっかり)

お掃除
ラクラク
排水口
(積高・防かじ仕様)

お掃除
ラクラク
鏡

お掃除
ラクラク
人大浴槽

お掃除
ラクラク
カウンター

お問い合わせは、TOTOお客様相談室へ
0120-03-1010

受付時間 9:00～17:00
(夏期休暇、年末年始は除く)

TOTOホームページ
<https://jp.toto.com>

※詳細はカタログまたは弊社WEBサイトをご覧ください。

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客様さまNo. (封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999

*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。